

第三章 會議ニ對スル帝國政府ノ態度

第一節 對英米豫備交渉

豫備交渉
開始

英米兩國ノ豫備交渉中帝國政府ハ主トシテ在英松平大使ヲ通シテ逐一詳細ニ交渉ノ經過ニ關スル通報ヲ受ケ終始形勢ノ推移ヲ注視スルト共ニ適當ナル機會ニ於テ我主張ヲ開陳貫徹スルノ素地ヲ作り置クコトヲ必要ト認メ隨時政府ノ方針ヲ同大ニ開示セリ、而シテ日米間ノ豫備交渉ハ倫敦ニ於テ七月末ヨリ松平大使「ドーズ」大使間ニ且之ト呼應シテ華盛頓ニ於テ出淵大使ト米國當局トノ間ニ行ハレ又日英間ノ豫備交渉ハ八月末ヨリ松平大使ト「マクドナルド」首相トノ間ニ行ハレタリ

帝國政府
ノ要求及
英米側ノ
主張

右交渉ニ當リ帝國政府ハ我方要求ノ根本タル八吋砲巡洋艦最大保有國ノ補助艦總括的七割、八吋砲巡洋艦最大保有國ノ七割並ニ潛水艦現有量八萬噸ノ主張ヲ反覆説明セシメ之カ貫徹ニ力メタルモ英國側ハ八吋砲巡洋艦ニ關シ比率ニ付テ交渉スルニ難色ヲ示シ隻數ヲ以テ協定ヲ遂ケンコトヲ望ミ我方ヨリ英米兩國ノ八吋砲巡洋艦保有量夫々十五隻（十四萬六千八百噸）及十八隻（十八萬噸）ハ過大ニシテ軍縮ノ精神ニ悖ル點ヲ指摘シテ其低下ヲ求メ、之カ低下不可能ナルニ於テハ帝國ハ八吋砲巡洋艦保有量トシテ對米七割、十二萬六千噸隻數十三隻、古鷹級代換ニ至ル迄ノ過渡期ニ於テハ二隻ヲ新造シテ十四隻ヲ要求スル旨ヲ述ヘタルニ對シ英國側ハ日本ノ現有八吋砲巡洋艦數ハ既ニ英ノ七割四分ヲ占ムルノミナラス過渡期ニ於ケル二隻ノ建造ハ一九四六年又ハ七年ニ至ル迄ノ間日本ニ十四隻ノ保有ヲ認ムルコトナリ到底承認シ難シト反對シ米國側モ又華府條約主力艦ノ比率ヲ援用シテ我方七割要求ヲ肯シセス英米何レモ其十五隻十八隻ニ對シ我現有十二隻ヲ以テ協定ヲ遂ケンコトヲ求メ、又我カ潛水艦八萬噸要求ニ對シテハ英國ハ其ノ希望タル潛水艦全廢ハ決シテ之ヲ押通サントスルモノニ非サルモ成ルヘク之カ制限ヲ欲スル處日本要求ハ英國現有量ニ比シ三萬噸ヲ超過シ是亦承認シ難キノミナラス歐洲大陸諸國ヲ刺戟スルノ虞アリトナシ米國亦我要求ノ過大ナルヲ難シ引續キ松平出淵兩大使ハ極力帝國主張ノ貫徹ニ力

ムル所アリシモ英米何レモ我方從來ノ提議ノ形ニ於テハ容易ニ之ヲ應諾スルノ模様ナカリキ

此ノ如ク豫備交渉ハ主トシテ總括的七割八吋砲巡洋艦並ニ潛水艦ヲ中心トシテ行ハレ驅逐艦、主力艦、航空母艦ニ付テハ殆ント具體的討議ヲ見サリキ

第二節 會議招請ノ受諾並全權委員ノ任命

一、會議招請ニ對スル帝國政府ノ回答

帝國政府ハ十月十六日在英松平大使ヲシテ會議招請受諾ノ回答ヲ英國政府ニ交付セシメタリ、其ノ全文左ノ如シ

一九二九年
十月十六日
帝國政府
ハ英松平
大使ニ答
文

一、十月七日附貴輪ヲ以テ海軍軍備縮少問題ニ關シ貴國首相及在倫敦米國大使間ニ成立ヲ見タル暫定且非公式ノ協定ヲ通報セラルルト共ニ華盛頓條約ニ規定セラレタル艦種ニ付考究ヲ加ヘ且該條約第二十一條第二項ニ規定セラレタル問題ヲ協定處理スル爲倫敦ニ招集セラレントスル會議ニ帝國政府ノ參加ヲ招請セラレタリ本使ハ右貴輪ヲ領承ス

二、本使ハ右貴輪ノ内容ヲ本國政府ニ傳達シタル處帝國政府ハ右會議開催ヲ望マシキコトトスルニ全然同感ナルヲ欣幸トシ該會議ニ參列スヘキ代表者ヲ任命スルノ用意アル旨回答スル様訓令ニ接シタリ尙ホ所定ノ會議開會期日トシテ千九百三十年一月第三週初頭ヲ提議セラレタル處本國政府ハ亦之ニ同意ヲ表スルモノナリ

二、次ニ帝國政府ハ闡明ヲ要スヘキ一切ノ事項ニ付キ英國政府カ從前ノ通本使ト非公式會議ヲ繼續スルノ用意アルヲ知リ欣快トスルモノナリ帝國政府ハ過去三個月ニ亙リ倫敦ニ於テ貴國首相カ米國大使ト此ノ種ノ會談ヲ行ヒ之レニ依リ他ノ海軍國ニ會議參加ノ招請ヲ發スルニ先チ英米兩國政府間ニ重要事項ニ關スル協定ノ素地ヲ作ラレタルコトヲ了知シタリ本國政府ハ會議ニ附議セラルヘキ諸般ノ問題ニ關シ日英兩國政府間ニ協定ノ成立ヲ確保スル爲兩國政府カ右ト同様ノ手續ヲ執ランコトヲ最重大視スルモノナリ來ルヘキ會議ノ成功ハ斯ノ如キ豫備的會談カ満足ナル結果ヲ得ルヤ否ヤニ懸ルコト多大ナルハ明瞭ニシテ本國政府ハ特ニ重要ナル問題ニ關シテハ其ノ最終的決定ノ爲會議ニ提出セララルニ先チ英國

政府及本使間ニ非公式會談ヲ續行完了センコトヲ切望ス
四、前顯貴輪中ニ於テ英國政府ハ會議ノ討議事項ニ關シ追テ其ノ見解ヲ本使ニ通報セラルヘキ意向ナル旨陳述セラレタル
カ日本國政府ハ深甚ナル興味ヲ以テ斯ノ如キ通報ヲ期待シ且日本國政府ニ於テモ御來示ニ從ヒ英國政府ニ對シ同様ノ通
報ヲ爲スヲ欣幸トスヘシ

五、英米兩國政府間ニ暫定的ニ協定セラレタルモノトシテ貴輪中ニ記述セラレタル原則四點ニ關シテハ帝國政府ハ本使カ
近ク英國政府ト行フヘキ非公式會談ニ際シ其ノ所見ヲ開示スルコトアルヘシ唯此ノ機會ニ於テ千九百二十八年巴里ニ於
テ署名セラレタル戰爭拋棄ニ關スル條約ヲ軍備縮少ニ關スル一切ノ討議ノ出發點トナスヘシトノ原則ヲ衷心支持スルモ
ノナルコトヲ確言セント欲ス同條約ノ規定ニ依リ締約國間ノ相互關係ニ齟齬シタル國家ノ安全ノ感念ハ追テ海軍軍備縮
少ニ關スル未決問題ノ最終的解決ヲ容易ナラシムルニ至ルヘキコト帝國政府ノ疑ハサル所ナリ

六、最後ニ本使ハ本國政府ノ訓令ニ基キ日本國政府ハ該會議カ國際ノ平和及親善ヲ増進シ且人類ヲシテ現存及計劃中ノ軍
備ノ重キ負擔ヨリ免レシムヘキ方案ヲ採用スルニ成功センコトヲ深ク切望スル旨ヲ表明セムトス思フニ各國民ノ希求ス
ル所ハ軍備制限ニ止マラス實ニ軍備縮少ニ在ルヘシ

二、全權委員ノ任命

帝國政府ハ十月十八日貴族院議員若槻禮次郎、海軍大臣財部彪、在英大使松平恒雄及十二月二十七日在白大使永井松三ヲ
倫敦海軍會議ニ對スル全權委員ニ任命セリ

第三節 帝國政府ノ訓令

全權委員ノ任命ニ伴ヒ政府當局ト若槻、財部兩全權等トノ間ニ屢々非公式ノ協議行ハレ倫敦會議ニ對スル各般ノ準備ヲ進
メ居リタルカ十一月二十八日全權委員ハ帝國政府ノ訓令ヲ受領セリ

一九二二年十一月二十八日
帝國政府訓令全文

右訓令ハ我主張ノ眼目タル補助艦所要兵力ノ量及比率ニ於テ共ニ一定不動ノ實數ヲ指示セルモノニシテ其ノ全文左ノ如シ
一、今次ノ會議ニ於テ帝國政府ノ目的トスル所ハ海軍軍備ノ制限縮少ニ關シ内ハ我國防ノ安固ヲ期スルト共ニ國民負擔ノ
輕減ヲ圖リ外ハ列國間ノ平和親交ヲ増進スルニ足ルヘキ方法ヲ主要海軍國間ニ協定スルニ在リ

二、我國防ノ安固ヲ期セムカ爲ニハ帝國ノ國情並四圍ノ狀態ニ顧ミ海軍兵力ニ付自衛上絕對必要トスル最少限度ノ比率及
兵力量ヲ確保スルコトヲ要ス

三、軍備ノ實力ハ單ニ正規ノ兵力ノミナラス資源、商船隊及工業力等ノ潜在勢力モ亦其一部ノ要素ヲ成スモノニシテ帝國
ハ此等潜在勢力ニ於テ列國ニ劣ル所アルカ故ニ海軍軍備ノ制限縮少ヲ協定スルニ當リテハ特ニ此事情ヲ考量セラルヘシ
四、英米兩國補助艦勢力均等ノ原則ハ帝國政府ノ異議ナキ所ナルモ兩國間ノ協定ニ適用シタル勢力測度規程ヲ其儘帝國ト
ノ協定ニ適用スルノ當否ニ付テハ右測度規程ノ内容ヲ檢討シタル上帝國ノ態度ヲ決定スルコトトス

五、佛伊兩國ノ要望スル比率ハ亦帝國ノ利害ニ關スル所アルヲ以テ兩國交渉ノ推移ニ付テハ絶ヘス注意セラルヘシ

六、會議ノ結果成立スヘキ條約ノ有效期間内ニ世界ノ如何ナル方面タルヲ問ハス著シク海軍ノ現勢ヲ變更スルノ事態生シ
之カ爲締約國ノ一國カ其海軍力ニ依ル國防上ノ安全ニ付重大ナル脅威ヲ感スルニ至リタルトキハ締約國ハ之ニ應スル措
置ヲ協議スヘキ旨ノ條項ヲ設クルコトヲ要ス

七、陸軍及空軍問題ニ觸ルルコトハ徒ラニ論議ヲ錯雜セシメ會議本來ノ目的タル海軍問題ノ解決ニ困難ヲ加フル虞アルヲ
以テ之ヲ避ケ萬一此等ノ問題ニ論及スル必要ヲ見ルカ如キ場合ニモ陸軍、空軍ニ關スル國際聯盟軍備縮少會議準備委員
會ノ決定事項ニ累ヲ及ホササルコトニ留意セラルヘシ

八、國民負擔ノ輕減ヲ圖ラムカ爲ニハ補助艦協定ノ一部ニ於テ現有勢力ノ擴張ヲ見ルノ已ムナキニ至ルコトアリトスルモ
右協定ノ全部ヲ秤量シテ軍備制限ニ止マラス更ニ進ンテ軍備縮少ノ實ヲ舉グルコトヲ要ス

九、國防ノ安固ト國民負擔ノ輕減トヲ調和セムカ爲ニハ我所要ノ比率ヲ保持スルト共ニ彼我保有兵力量ヲ減少スルノ方途

ニ出ツルノ外ナシ仍テ兵力量ノ協定ニ當リテハ最大海軍國タル英米兩國ノ保有兵力量ヲ縮少シ以テ一般ニ各國保有兵力量ヲ遞減スルコトニ力ヲ致サルヘシ

十、華府海軍軍備制限條約中一部ノ條項ヲ改訂シ以テ國民負擔ノ輕減ニ資スルハ亦帝國政府ノ重要視スル所ナリ之カ爲帝國政府ハ關係列國ト共ニ特定ノ事項ニ關シ之カ改訂ヲ議スルノ用意アリト雖既定ノ基礎ヲ變改シテ條約自體ノ存續ヲ危クシ若ハ現存ノ制限ヲ緩和シテ同條約ノ效果ヲ減殺スルカ如キコトナキヲ要ス

十一、列國間ノ平和親交ヲ増進セムカ爲ニハ各國共ニ他國ニ脅威ヲ感セシムルカ如キ軍備擴張ノ新計畫ヲ避ケ國民ノ間ニ猜疑敵視ノ感情ヲ生セシメ易キ製艦競争ノ弊ヲ絶テ各自國ノ國防ニ關スル危惧不安ノ因ヲ除キテ相互信頼ノ念ヲ深クスルニ足ルヘキ協定ノ途ヲ講スルコトヲ要ス

十二、會議各參列國ニ對シテハ均シク公平中正ノ態度ヲ持シ特定ノ國ト結ヒテ他ニ當ルカ如キ感ヲ與ヘサルコトヲ旨トセラルヘシ

十三、或ハ英米ト佛伊トノ間或ハ佛伊兩國ノ間ニ意見衝突シテ事態紛糾ヲ來スカ如キ場合ニハ帝國全權委員ハ前項ノ趣旨ニ依リ何レノ一方ニモ偏倚セサルト共ニ我立場ニ不利ノ影響ヲ來ササル限リ調停斡旋ノ勞ヲ執リ以テ會議ノ圓滿ナル進捗ニ努力セラルヘシ

十四、主要海軍國タル日英米佛伊五國共ニ協定ノ當事者トナルコトハ素ヨリ望ム所ナリト雖モ事情已ムヲ得サル場合ニハ帝國政府ハ日英米三國間ニ限ル協定モ次善ノ策トシテ其ノ成立ニ協力スルノ用意ヲ有ス

十五、一般軍備ノ制限又ハ縮少ヲ目的トスル國際聯盟ノ事業ニ付テハ帝國政府ハ從來常ニ誠意ヲ以テ之ニ贊同シ今後モ引續キ之カ完成ニ協力スルノ方針ナリト雖必スシモ陸海空軍全部ニ互ル協定ヲ同時ニ成立セシムルノ要ナク主要海軍國ノ間ニ先ツ海軍々備問題ニ關シテ協定スルハ最實際的ニシテ又國際聯盟ノ事業ニ寄與スル所以ナリト認ム

十六、海洋自由ノ問題其他海戰法規又ハ中立法規ノ制定又ハ改訂ニ關スル問題ニ付テハ從來英米兩國ノ主張スル所相反ス

ルノミナラス我國トシテモ其利害得失ハ別ニ慎重ナル攻究ヲ要スルモノアリ且之ヲ軍備問題ト直接關聯セシメテ一舉ニ協定セムトスルニ於テハ會議ノ紛糾ヲ來スノ虞ナシトセス從テ會議ノ形勢ニ伴ヒ前記國際法問題ヲ議題トスル必要アル場合ニハ討議ノ範圍ヲ極メテ少數ノ原則ニ限リ以テ海軍協定ノ成立ヲ阻礙セサル事ニ留意セラルヘシ

十七、補助艦ニ關スル協定不幸ニシテ完全ナル成立ヲ見サル際ニ於テモ主力艦ニ關スル協定ハ尙之ヲ成功セシムルヲ可トスルニ依リ此目的ヲ達セムカ爲會議ノ大勢ニ鑑ミ審議ノ順序其他折衝ノ方法ニ付深甚ノ注意ヲ加ヘラレ度シ

十八、補助艦比率及兵力量ニ關シ豫備的非公式會談ニ於テ了解ヲ遂クルコトハ帝國政府ノ最重キヲ置ク所ナルヲ以テ之カ達成ニ努メラルヘキハ勿論右了解ノ成立ニ先テ過早ニ本會議ニ上程セラルル如キコトハ極力之ヲ避クルニ努メラレ度シ

十九、會議ノ議題トナルヘキ諸事項ニ關シ從來帝國政府ヨリ關係國駐在帝國使臣ニ與ヘタル累次ノ訓電ハ本訓令ノ補則トシテ了知セラルヘシ

記

一、帝國海軍軍備ノ要旨

帝國海軍軍備ハ國家ノ自主獨立ヲ擁護スルヲ目的トシ固ヨリ何等侵寇の意圖ヲ有スルモノニ非ス之カ爲ニハ西部太平洋方面ニ於テ或ル一國ノ使用スル海軍兵力ニ對抗シ以テ我國土ノ安全ヲ期スルト共ニ帝國特殊國情ニ基キ國家存立ニ必要ナル海上交通線ヲ防護スルニ足ルモノタルヲ要ス

二、補助艦所要兵力量及比率

(一) 華府海軍軍備制限條約ノ存續スル現狀ニ於テ前號ノ任務達成ニ必要ナル帝國ノ所要補助艦兵力ハ量ニ於テ昭和六年

(會議ニ於テ帝國全權ノ意見ヲ示スルヘキ方針)

度末ニ於ケル我現有量(附表參照)ヲ標準トシ又比率ニ於テハ米國ニ對シ少クモ總括的ニ七割トス

- (二) 所要兵力量ノ標準右ノ如シト雖帝國海軍軍備ノ要旨ニ悖ラス且所要比率ヲ失ハサル限り各國ト協調シ之ヲ縮減スルニ吝ナラス但シ潛水艦ニ付テハ此限ニ在ラス

- (三) 二十種砲搭載大型巡洋艦ニ於テハ特ニ對米七割ヲ又潛水艦ニ於テハ昭和六年度我現有量ヲ保持スルヲ要ス此等ノ要求ヲ補助艦對米總括的七割ノ主張ト兩立セシメムカ爲ニハ帝國海軍軍備ノ要旨ニ悖ラサル限り輕巡洋艦、驅逐艦ニ於テ多少ノ犧牲ヲ忍フハ已ムヲ得サルコトニ屬ス

三、補助艦代換艦齡

代換艦齡ハ軍備縮少ノ本旨ニ鑑ミ軍艦固有ノ任務ニ堪ヘ得ルヲ程度トシ可成長ク之ヲ協定スルニ異議ナシ但各國勢力ノ權衡及代換實施ノ調節並工業力ノ維持上既成艦ノ一部ニ付テハ協定艦齡内ニ於テモ代換シ得ル如ク規定スルヲ要スル場合アルヘシ

四、制限外艦船

制限外艦船ヲ定ムルニハ概ネ左ノ考慮ヲ要ス

- (イ) 艦型、武裝、行動力等小ナル爲專ラ防禦的用途ニ充ツル軍艦ハ制限外トス

- (ロ) 商船ニ僅ノ改裝ヲ行ヒテ容易ニ附與シ得ル程度ノ戰鬥力ヲ有スルニ過キサル軍艦ハ制限外トス

五、華府海軍軍備制限條約ノ一部變更ノ範圍及程度ハ左記ニ據ル

(一) 主力艦

主力艦ノ廢止又ハ其ノ協定隻數變更ニハ同意シ難キモ同條約ニ依ル制限ヲ左ノ範圍ニ於テ變更スルコトハ軍費ノ輕減ニ貢獻スル所アルヲ以テ之ヲ希望ス

- (イ) 代換期間ノ伸張

- (ロ) 艦型縮小

- (ハ) 艦齡延長

代換開始期ノ延期ニ關シテハ大勢ニ順應シ差支ナシ

(二) 航空母艦

帝國ノ國情ニ稽ヘ航空機ヲ帝國ノ近海ニ持チ來ス仲介タルヘキ艦船ハ成ルヘク少量ニ制限スルヲ可トシ尙軍費ノ輕減ニ貢獻スル爲メ同條約ニ依ル航空母艦ノ制限ハ左ノ範圍ニ於テ變更スルヲ有利トス

- (イ) 一萬噸以下ノ補助航空母艦ヲ華府條約ノ規定スル航空母艦保有量中ニ包含セシムルノ目的ヲ以テ同條約ニ依ル航空母艦ノ定義中一萬噸ヲ超ユル件ノ制限ヲ廢スルコト

- (ロ) 艦齡ノ延長

艦型ノ縮小ニ關シテハ大勢ニ順應シ差支ナシ

- (三) 右ノ外條約ノ效力ニ重大ナル影響ナキ小變更

附表

昭和六年度末（一九三三年三月末）帝國現有勢力

主 力 艦	航 空 母 艦	補 助 航 空 母 艦	巡 邏 艦	洋 行 艦	驅 逐 艦	潛 水 艦	敷 設 艦	砲 艦	潛 水 母 艦	掃 海 艇	測 量 艦	運 送 艦	細 有 艦	種 別	有 效 艦 齡 內		艦 齡 超 過 艦		制 限 外 艦 船 (訓令記載ノモノ)		合 計	
															隻 數	噸 數	隻 數	噸 數	隻 數	噸 數	隻 數	噸 數
1	1	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	292,400	1	1	1	1	1	292,400
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	53,800	1	1	1	1	2	53,800
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	150,700	1	1	1	1	2	150,700
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	108,400	1	1	1	1	2	108,400
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	94,655	1	1	1	1	2	94,655
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	3,760	1	1	1	1	2	3,760
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	66,040	1	1	1	1	2	66,040
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	9,880	1	1	1	1	2	9,880
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	16,420	1	1	1	1	2	16,420
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	1,330	1	1	1	1	2	1,330
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	3,980	1	1	1	1	2	3,980
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	21,015	1	1	1	1	2	21,015
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	3,690	1	1	1	1	2	3,690
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	53,765	1	1	1	1	2	53,765
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	213,033	1	1	1	1	2	213,033
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	18	1	1	1	1	2	18
1	2	2	2	2	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	18	1	1	1	1	2	18

第四節 若槻財部兩全權ノ米國經由渡英

一九二九年十一月三十日
全權出發

米國政府ニ於テハ本邦ヨリ派遣セララル全權委員ノ米國經由渡英ヲ希望シ帝國政府ニ於テモ我全權力會議開會前米國政府當局ト意見ノ交換ヲ爲シ置クヲ可ナリト認メ米國側ノ希望ニ應スルコトニ決シタルヲ以テ若槻、財部兩全權ハ十一月三十日横濱出帆米國經由倫敦ニ赴クコトナリ十二月十二日「シアトル」ニ到着セリ
米國ニ於テ執リタル兩全權ノ措置ハ之ヲ二大別スルコトヲ得ヘシ、一ハ即チ米國民ニ對スル我立場ノ説明ニシテ他ハ米國當局トノ交渉ナリ

(一) 米國民ニ對スル我立場ノ説明

兩全權ノ説明ニ對スル米國民ノ印象

米國民ニ對シ我主張ヲ了解セシメンカ爲メニハ我立場ヲ率直且明確ニ表示スルヲ要スル處兩全權力其ノ演説ニ於テ、新聞ニ與ヘタル聲明ニ於テ將又新聞記者トノ質問應答ニ於テ執リタル態度ハ米國民一般ニ良好ナル印象ヲ與ヘタルモノノ如シ我七割要求ニ對シ米國民及新聞力倫敦會議ヲ通シテ大ナル反對ノ聲ヲ擧ケサリシハ一般ニ米國民ノ對日感情ノ良好ナルニモ由ルコト勿論ナルモ右説明ニ依リ彼等カ我地步ヲ了解シタルコト亦其ノ一理由ト認ムルコトヲ得ヘシ

一、兩全權ノ演説及聲明

兩全權ノ演説及新聞ニ與ヘタル聲明ハ具體的數字ヲ掲ケテ我主張ヲ開陳セス概括的ナル用語ニ據レリト雖モ而モ確乎タル態度ヲ以テ我立場ヲ述ヘ且帝國ハ各國ト共ニ最モ誠實ニ會議ノ成功ヲ冀求スルモノナルコトヲ説キタリ

十二月十二日「シアトル」ニ於ケル若槻全權ノ演説及同月十六日華府ニ於ケル聲明ハ最モ良ク此ノ點ヲ表明ス即チ

一九二九年十一月十二日
若槻全權ノ演説

「シアトル」ニ於ケル演説ハ先ツ今次會議ニ對スル我國民ノ期待ノ如何ニ大ナルカラ述ヘ我國民ノ平和的態度ヲ歴史的ニ説明シテ不戰條約ニ對スル我民論ノ支援ノ大ナル事實ニ言及シタル後

「以上述ヘタル所ヨリ推考スレハ倫敦會議ニ對スル日本ノ態度ハ之ヲ了解スルコト容易ナルヘキ筈ナリ其ノ要諦ハ第一、

日本ハ單ニ軍備ノ制限ニ止マラス進シテ之カ縮少ヲ可能トスルコト及第二、日本ノ要求スル所ハ決シテ自國安全ノ最少限度ノ需要ヲ越ヘスト言フニ存ス軍備ノ制限ニ止ラスシテ寧ロ縮少ヲ計ルヘキハ「ケログ」條約ノ當然命スル所ナリ吾人ハ此ノ好機ニ方リ近代萬民ニ懷德ヲ與ヘタル重キ經費ノ負擔ヲ輕減シ得サルノ理ナシト考フ各當事國ノ何レモ相對的ニ縮減ヲ行ヒ軍備ヲ著シキ範圍ニ互リ縮少シ得サル理由ナシ他ノ會議參加國ニシテ斯ノ如キ協定ニ同意スルニ於テハ日本ハ直チニ之ト相對的ニ必要ナル縮減ヲ我海軍力ニ加フルノ用意ヲ有スルモノナリ

第二ノ要諦タル日本ハ自國ノ安全ノ最少限度ノ需要ヲ超ユサルヘシトハ外部ヨリノ攻撃ニ對シ自國ヲ防衛スルニ必要ナル兵力ヲ維持セサルヘカラストノ意味ナリ

吾人ハ日本ノ近海ニ於ケル我カ防衛ニ必要ナル限度ヲ超エタル何等軍備ヲ保有センコトヲ提言スルモノニアラス日本ノ保有セント欲スル海軍勢力ハ常ニ此ノ標準ニ據ツテ測定セララルモノナリ日本カ米國海軍若ハ英國海軍ト均勢ヲ要求シ居ラス又之ヲ要求セントスルモノニ非ラサル事實自體既ニ充分ニ日本海軍力侵寇的觀念ヲ寸毫モ抱懷セサルコトヲ立證スルモノナリ「防衛的の最少兵力」之レ吾人ノ基準ニシテ吾人ハ何國ニ對シテモ脅威ヲ與ヘントスルモノニアラサルト同時ニ又何國タリトモ我國ニ對シ脅威トナルコトヲ欲セサルモノナリ

故ニ來ルヘキ會議ニ於ケル日本ノ標語ハ「縮少及無脅威」ナリ余ハ斯ノ如キ日本ノ態度ハ全世界ノ同情的了解ヲ得ルモノナルヲ確信ス而シテ會議ニ於ケル友好相互了解ノ雰囲気内ニ於テ又參加列國間ノ公正平和ナル願望ト政策トニ對スル相互信頼ノ念ニ基キ人類ノ福祉恆久平和ノ點ヨリ見歴史的ナル一大事業ノ成就セララルヘキコトヲ疑ハサルモノナリト述ヘ

華府ニ於ケル聲明ハ

一九二九年十一月十六日
華府ニ於ケル聲明

不戰條約ノ締結自體カ倫敦會議成功ノ保障タルコト及參加國ハ他ノ參加國ノ政策ニ信頼ヲ置キ會議ニ臨マントシツツアルヲ以テ「吾人ハ倫敦會議ニ多大ノ希望ヲ繫クヘキ充分ナル理由ヲ有スル次第ニシテ軍備競争ヲ終熄シ且海軍力ヲ實質

の二減少スルノ成果期シテ俟ツヘキモノアルヲ信ス」ル旨ヲ述ヘ次テ

『日本ハ軍備ノ縮少ヲ主張ス即日本ハ會議參加國ノ海軍軍備ヲ低下セシメト主張シ且我海軍勢力ヲ他國ト相對的ニ縮少スルノ用意ヲ有スルモノナリ

右縮少ヲナスニ當リ日本トシテハ國民ノ國家安全威ニ動搖ヲ來サシメサル様願念セサルヲ得サルコト勿論ナリ

右ノ考慮ニ基キ日本カ攻撃ニハ足ラス只日本近海ニ於ケル防禦ニノミ充分ナル最少限度ノ勢力ヲ保有スルコト至當ナリト考フ來ルヘキ倫敦會議ニ於ケル日本ノ提案ハ一ニ此ノ原則ヲ基礎トスルニ外ナラス日本ハ他ノ大國ニ比シ均勢以下ノ比率ヲ受諾スルノ用意アルモノナルヲ以テ侵略の行動ノ意圖毫無之コト極メテ明白ナリ吾人ハ倫敦ニ於テ軍備縮少及恆久平和ノ保障ナル大事業カ大ナル進展ヲナサンコトヲ確信スルモノナリ』ト述ヘタリ

二、新聞記者接見

「シヤトル」(十二月十一日)「シカゴ」(同月十五日) 華府(同月十六日)及紐育(同月十九日)ニ於ケル新聞記者接見ニ當リテハ演説及聲明ノ場合ト異リ其ノ質問ニ對シ躊躇スル所ナク極メテ端的且具體的ニ我主張ヲ説述セリ

華府ニ於ケル接見ノ概要左ノ如シ

一九二九年十二月十一日
華府ニ於ケル新聞記者接見ノ概要

(イ) 日本ハ巡洋艦、驅逐艦及潛水艦ノ補助艦總噸數ニ付總括的七割ヲ要求スルト同時ニ各艦種間ニ多少噸數ノ融通ヲナシ得ルコトヲ主張スルモノニテ即チ大型巡洋艦ニ付テハ最大海軍國ノ七割ヲ要求シ潛水艦ニ付テハ國防上必要ナル噸數ヲ保有セントスルモノナルカ右ノ場合特ニ潛水艦ノ割當ニ充當スル爲例ヘハ小型巡洋艦又ハ驅逐艦ニ付テハ七割以下ノ噸數ニテ満足スヘシ

(ロ) 潛水艦ハ日本ノ地理的狀態ニ顧ミ並ニ日本カ劣勢ナル海軍ヲ以テ満足スル以上缺クヘカラサルモノニシテ之カ廢止ニハ贊成スル能ハス潛水艦問題ニ付テハ日本ハ佛伊ト何等協議シタルコトナク日本ノ所要量ハ其ノ獨自ノ立場ニ基クモノナリ但シ六百噸以下ヲ無制限トスル要求ハ之ヲ主張スルモノニ非ラス

(ハ) 此ノ際主力艦廢止問題ヲ考慮スルハ時期尙早ナリ尤モ日本ハ將來右廢止問題ヲ考慮シ得ヘキ時期到來センコトヲ希望ス

(ニ) 新嘉坡海軍根據地問題ニ付テハ英國ヨリ何等特ニ聞ク所ナキモ日本トシテハ進テ同根據地廢止問題ヲ今次會議ニ提起スル考ナシ

(ホ) 日本ハ不戰條約ノ精神ヲ尊重スルモノニシテ同條約ヲ軍縮問題ノ出發點トスルコトニ贊意ヲ表スルモノナルハ云フ迄モ無キモ倫敦ニ於テ成立スヘキ協定中ニ同條約ノ趣旨ヲ繰返シ挿入スヘキヤ否ヤハ會議ノ情勢如何ニヨリ定マルモノニシテ今直ニ何等言明スルヲ得ス

(ヘ) 倫敦ニ於テハ參加國五國間ニ協定成立スヘキコトヲ確信スルモノニシテ右五國協定不成立ト云フカ如キ假定的ノ場合ニ付詳論スルヲ得ス

尙華府以外ノ地ニ於ケル接見ニテ説述ノ問題中重要ナルモノヲ舉クルニ左ノ如シ

一九二九年十二月十一日
華府ニ於ケル新聞記者接見ノ概要

(イ) 日本ハ主力艦航空母艦ニ關シテハ五、五、三ノ比率ヲ再議スルノ意嚮ナシ他ノ艦種ニ關シテハ日本ハ最大海軍國ニ對スル七割ヲ要求スルモノナルカ右ハ決シテ新ラシキ要求ニ非ス華府會議當時既ニ之ヲ明瞭ニ表明シタリ

(ロ) 食糧船問題ニ關スル大統領ノ意見ニハ主義トシテハ贊同ス但シ本問題ハ國際法ニ關係アル幾多ノ専門的事項ヲ包含スルヲ以テ茲ニ詳論スルコトヲ得ス

(ハ) 日本ハ防備制限協定ノ改訂ニ贊セス吾人ハ比律賓ヲ取ラントスルカ如キ意圖ヲ有セス斯ノ如キ行動ハ即チ米國トノ戰爭ニ外ナラサル處右ハ日米ノ經濟關係ノ密接ナルニ顧ミ不可能ナリ之ト同時ニ日本ハ比律賓等日本近海ニ於ケル外國ノ艦艇ヲ好マス蓋シ右ハ日本國民ヲシテ防備ノ増大ヲ要求セシムルニ至レハナリ(以上「シヤトル」ニ於ケルモノ)

(ニ) 日本ハ主力艦ニ關スル比率ハ之ヲ變更スルノ意嚮ナキモ其ノ代換延期ハ經費節減ニ資スル所アルヲ以テ之ニ贊ス補助艦ニ關シテハ最大海軍國ノ七割ヲ希望スルノミナラス之ヲ主張スルモノナリ右ハ既ニ他國ニ對シ劣勢ニテ満足ス

ルモノナルヲ以テ決シテ他國ヲ脅威シ又ハ攻撃的意圖アルコトヲ示スモノニアラス（以上「シカゴ」ニ於ケルモノ）
 (ハ) 補助艦問題ハ倫敦會議ノ最重要ナル問題ナルカ新聞紙上日本カ他ノ補助艦種例ヘハ驅逐艦、潛水艦等ニ於テヨリ大ナル讓歩ヲ獲得スレハ大型巡洋艦ニ付七割ノ主張ヲ拋棄スルモノナリト記載セルモノアルカ右ハ誤レリ、日本ハ大型巡洋艦ニ付七割ヲ固ク主張ス唯タ補助艦總括的七割主張ノ關係上各艦種ニ付七割ヲ要求セサルノミ（以上紐育ニ於ケルモノ）

(二) 國務長官トノ會談

兩全權ト國務長官トハ前後二回兩國主張ノ根本ニ付極メテ率直詳細ナル意見ヲ交換セリ、即第一回會議ニ於テ國務長官ハ米國カ多大ノ犧牲ヲ拂ヒテ始メテ成立セル華府條約ノ規定スル主力艦ヨリ高キ比率ヲ求ムルハ米國民ニ惡印象ヲ與フルモノナルニ依リ比率ノ問題ヲ提起スルコトナク具體問題トシテ取扱ハンコトヲ求メ若槻全權ハ我七割要求ノ理由ヲ詳述シテ具體的數字ヲ呈示シタリ

第二回會議ニ於テ國務長官ハ我方主張ノ數字ハ（米國側ニテハ巡洋艦二十二萬六千噸ト計算セリ）米國民及議會ヲシテ對抗的増艦ヲ餘義ナキニ到ラシムルモノトノ考ヲ懷カシムルコト必セリトテ我主張ニ反對シタリ

一、國務長官トノ第一回會見

兩全權ハ出淵大使ト共ニ齋藤部長帶同十二月十七日午後三時豫定ノ通國務長官ヲ私邸ニ往訪セリ（國務長官微恙ノ爲メ私邸ヲ會見ノ場所トセリ米國側出席者ハ長官ノ外「モロー」大使及「カッスル」大使）

(イ) 七割原則ノ問題

先ツ若槻全權ヨリ日本ハ豫テ中外ニ聲明セル通切ニ倫敦會議ノ成功ヲ祈リ而モ單ニ制限ニ止ラス實際ニ減縮ノ實ヲ舉ゲン事ヲ希望ス日本ノ要求スル比率ニ付テハ豫々出淵大使カ本國政府ノ訓令ニ基キ申述ヘ來リ居リ既ニ御承知ノ事ト考フルモ由來日本ハ其ノ軍備ノ根本ハ主トシテ國民ノ安全威ヲ動搖セシメサル事即チ攻ムルニハ足ラス守ルニハ足ルトノ程度ノ勢力ヲ保有セントシ來リシカ七割トハ即チ日本近海ニ於テ防禦ノ目的ヲ達スルニ必要ナリトノ基準ヨリ割リ出サレ

若槻全權
ノ申出

一九二九年十二月十七日
會談
米日

米國務長
官說明

タルモノニシテ是非トモ關係諸國ノ承認ヲ得タキ點ナリ故ニ之ニ對シテハ同情的御考慮ヲ仰カサルヲ得スト率直ニ申述ヘ更ニ本問題ニ關シテハ先頃出淵大使ニ實際ノ事情ニ即シテ解決スルノ方法ヲ講セントノ申入レアリタル處日本ハ勿論喜ンテ之ヲ考慮スヘキモ英米間ノ假協定ノ内容ヲ詳ニセサル爲メ話ヲ進ムル根據ヲ缺クノ嫌アルニ付此ノ機會ニ長官ヨリ御話ヲ願フコトヲ得ハ最モ便宜ト思考スル旨ヲ述ヘタル處長官ハ英米假協定ハ出淵大使ニ通報セル點以外ニ何物モナキ旨ヲ答ヘ次テ比率問題ニ移リ「ヨリ大ナル比率」ノ問題ニ關シテハ今回ノ會議ノ基礎的事態ヲ作り上ケタル華盛頓會議ニ關シ米國カ大ニ寛容ナル態度ヲ取リ其ノ犧牲ニ於テ最先ニ立テ當時有シタル海軍擴張案ノ半以上ヲ拋棄シ更ニ日本ニ近接スル領土ニ於ケル防備ノ現狀維持ヲ諸シ初メテ同協定ヲ見タルコト米國民ノ「グッド、フエース」ヲ以テ確信シ居ル處ナリ要スルニ華盛頓會議ノ根本精神ハ列國間ニ相互信頼ノ時代ヲ現出セシメ軍備競争ヲ避ケントスルコトニ存シタル次第ナルカ壽府會議失敗ニ終リタル以來米國ハ再ヒ軍艦建造ニ着手スルノ止ムヲ得サルニ至レリ

加之米國海軍側ハ更ニ列國ニ伴フ丈ノ他ノ補助艦ヲモ建造セムトシテ一大擴張案ヲ作成スルニ至レリ右ハ米國民カ何等カ満足ナル協定ニ達シ得サル限リハ他國ノ海軍力ニ是非トモ對抗セサルヘカラストノ點ニ重キヲ置クコトヲ示スモノニ他ナラス故ニ日本側ノ主張ハ米國民ニ對シ甚タ惡キ印象ヲ與ヘ毫モ會議ノ成功ニ寄與スル所以ニアラサルコト曩ニ出淵大使申出ノ際ニモ申述ヘタル通ナリ又米國民ハ今尙戰艦カ海軍力ノ中心ナルコトヲ確信シ居ルモ其ノ勢力ヲ減縮スルノ協定ニ達スルヲ得ハ幸トスル所ナリ然レトモ日本ニ於テ五對三ノ比率ニ立ツ戰艦ノ勢力ヲ縮減シ其財政ノ餘力ヲ以テ十對七ノ比率ヲ要求スル巡洋艦ノ勢力ノ増大ヲ計ラントスルハ米國側ヲシテ甚タ不利ノ地位ニ陷ラシムルモノナリ從テ日本側ニ於テ比率問題ヲ提起セラレサランコトヲ欲ス勿論自分ハ如何ナル國家ニ對シテモ強テ劣勢ヲ押付ケントスルモノニアラス又其ノ名譽及自尊心ヲ傷クルカ如キ協定ニ調印センコトヲ求ムルモノニアラス此點ハ能ク御諒解ヲ願ヒ度シ從テ豫テ出淵大使ニ對シテモ事ノ比率問題ヲ離レ現實ノ狀態ヲ基礎トシテ討議センコトヲ申入レタル次第ナリ即チ日本カ現ニ巡洋艦勢力ニ付採リ來レル造艦政策ヲ考慮ニ入レ何等カノ諒解又ハ協定ニ到達センコト然ルヘシト考ヘ居レルヲ以

ヲ二十萬六千噸ノ巡洋艦勢力ヲ二十二萬六千噸ニ増加セシメテ申出ラレシ際稍々失望ノ念ヲ禁スル能ハサリシモノアリタリ自分トシテハ比率ノ關係ヨリ割出サレタル數字ヨリモ現有ノ二十萬六千噸ヲ以テ討議ノ目的物ト考ヘタシト答ヘタルニ付

若槻全權
說明

若槻全權ヨリ華府會議ニ於テ日本ハ初メヨリ七割ヲ主張シ居リタルカ其ノ主張ノ貫徹セサリシコトヲ國民ハ深ク遺憾トシ居リ防備現狀維持ノ事實ヲ説明シ國民中之ヲ諒解セルモノアルモ一般ノ抱懷スル遺憾ノ念ハ拭フヘカラス今後軍縮會議開催ノ場合ニハ華府會議ニ於テ協定セラレサリシ艦種ニ付是非共七割要求ヲ貫徹セサルヘカラストナシ居ル次第ニテ右ハ既ニ國民ノ信念トナリ居レリ防備現狀維持、軍艦廢棄ノ犧牲等ハ相互ノコトニテ日本側ニ於テモ同シク多大ノ犧牲ヲ拂ヒタリ從テ新ニ會議ヲ開ク場合ニ於テハ七割ヲ要求セサルヘカラストノ國論ニテ萬一之ヲ得難キ場合ニハ國防ノ上ヨリ不安ヲ感ストナス現狀ナリ勿論主力艦五、五、三ノ比率ハ改メテ論議ニ上ス考ヘ毫モナシ併シ其當時ト現狀トハ一萬噸巡洋艦ノ出現其ノ他兵器ノ發達等ニ依リ事態ヲ異ニスルヲ以テ此點ヨリ見テ華府條約ノ比率ヲ基礎トシテ今日軍縮問題ヲ議スルハ當ヲ得サル事ト考フ此ノ點ハ充分ニ御諒承ヲ願ヒ度シ主力艦ニ付テハ日本ニ於テモ依然軍備ノ中核ト考ヘ居レルモ軍縮ノ見地ヨリ艦齡ノ延長、艦型ノ縮小、代換期間ノ延長等ヲ考慮シ然ルヘシトノ考ナルカ主力艦ノ勢力ヲ減シ其ノ餘力ヲ以テ巡洋艦ノ噸數ヲ増加セント云フ如キ考ハ更ニナシ右ハ日本國民ノ確ク信スル所ナリ

成ルヘク比率ニ言及セス實際狀態ヲ規準トスヘシトノ趣旨ニハ強イテ反對スルモノニハアラス併シ英米間ニ先ツ均勢ノ原則ヲ定メ之カ適用トシテ具體的數字ニ研究ヲ加ヘタル如ク標準ヲ定メテ話ヲ進メ度シトノ意味ニ於テ比率ヲ申述ヘタル次第ナルカ實際問題トシテ自ラ比率ヲ含マセテ具體的決定ヲナスモ一方法ナルヘキヲ以テ其ノ方面ヨリ見タル具體案ヲ申述フルモ可ナリ尙二十萬六千噸ノ現勢力ヲ以テ二十二萬六千噸ナル數字ヲ提示セリトテ失望ノ感ヲ抱キタリトノ御話ナルカ右ハ十萬八千四百噸ノ大型巡洋艦約九萬噸ノ小巡洋艦トノ合計ト想像セラルル處右二萬噸ノ差ハ御察知ノ通七割ナル比率ヨリ割出サレタルモノニシテ從テ優勢海軍國ニ於テ低下セハ自ラ下ルヘキ數字ニ過キスト説明セリ

(ロ) 七割ニ關スル具體的主張

若槻全權
提案

次テ若槻全權ハ我方ニ具體案アラハ承知シ度シトノ國務長官ノ問ニ對シ八吋砲一萬噸巡洋艦ニ關スル米國ノ保有量ヲ假ニ十八隻トセハ日本ニ於テハ一萬噸巡洋艦若干、一萬噸未満ノ巡洋艦若干ヲ合セテ十二萬六千噸十三隻ヲ保有シ度キ希望ナリ然レトモ是ハ結局ノ數字ニシテ過渡時代即チ古鷹級代換迄ノ期間ハ今日現有ノ一萬噸巡洋艦八隻古鷹級四隻及一萬噸未満二隻合セテ十四隻トシ度シト考フ之ハ一見隻數多キカ如キモ其實力ヲ檢スルニ古鷹級四隻一萬噸未満二隻ト云フカ如キ劣勢ノモノヲ含ミ居リ一萬噸八吋砲巡洋艦ヲ揃ヘテ有スル海軍勢力ニ對シ遙ニ劣レルコトハ一目瞭然タリ

次ニ潛水艦ニ付テハ劣勢海軍ヲ保有シ且ツ島國タル關係ヨリ見テ日本トシテハ必要ノ自衛的武器ナリ今日日本ノ有スル造艦計畫ノミニテハ實ハ日本ハ不充分ト思ヒ居ル次第ナルモ軍縮會議モ開カレントスル現勢ニ顧ミ現有勢力七萬八千五百噸ヲ以テ満足セントシ居ル次第ナリ乍併他國ニ向ツテ均勢ヲ要求スルモノニハアラス其比率カ七分ノ十トナルモ何等異議ヲ有スルモノニアラス

米國務長
官ノ意見

尙小巡洋艦、驅逐艦ニ付テハ他國ニ於テ其保有量ヲ減少セラルレハ日本モ從テ減少スルニ決シテ各ナルモノニアラス之即チ現狀ニ即シテ案出シタル日本側ノ案ナリト述ヘ長官ノ腹藏ナキ意見ヲ叩キタル處

長官ハ右ハ先頃出淵大使ヨリ伺ヒシ所ト同様ト考フルモ米國側ニ於テ再ヒ之ヲ考量センコトヲ希望セラルルニ於テハ欣然之ニ應スヘシ唯一一般の感想ヲ申述フレハ本問題ハ一萬噸級ニ先ツ議論ヲ集中セス他ノ艦種ト合セテ考量スル必要アルモノト考フ一萬噸級巡洋艦ノミヲ取リテ論スレハ米國民ヲ満足セシムル如キ結果ニ到着セン事困難ナリ二十二萬六千噸ナル數字ハ一方ニ於テ日本海軍力ノ増加ヲ意味シ他方米國海軍力ノ低下ヲ要求スルモノナリトノ感想ヲ與フル事ヲ免レヌ從テ自分ハ此感想ノ非ナルコトヲ證明シ得サルヲ虞ル然レトモ自分ハ決シテ自分ノ提議ニ對シテ門戸ヲ閉鎖スル考ヲ有セサルニ付喜ンテ此ノ上トモ討議ヲ繼續シタシト述ヘタリ

日米共
聲明

茲ニ於テ若槻全權ヨリ病氣中長時間ノ會談ヲ謝シ十九日更ニ會見ヲ約シ新聞ニ對シテハ「會議ノ成果ニ影響アル兩國ノ

スリ

(ハ) 會談ニ關スル兩全權ノ感想

トス

二價ス

in the unrestricted classes. Pending attempts at restriction we have delayed our cruiser and submarine programs.

that the United States must build up to what other nations were doing. This was shown by the passage of the cruiser

limitation was reached.

of confidence on which good will rests.

should regret anything that would in any way upset it.

remainder of the fleet, would seem to place us at a double disadvantage.

the unrestricted classes without disadvantage if that is possible.

nations.

二、國務長官トノ第二回會見

十九日午前十時國務省ニ於テ第二回會見ヲ爲シタリ（前回列席者ノ外「ジョーンズ」少將出席）

(イ) 我具體的要求ニ對スル國務長官ノ所見

先ツ若槻全權ヨリ第一回會見ノ際ニ於ケル具體的主張ニ對スル長官ノ意見乃至批評ヲ聞カンコトヲ求メタルニ對シ長官ハ簡明坦白ニ所見ヲ述フヘシトテ自分ハ華盛頓會議ニ依リテ招來セラレタル日米間ノ良好ナル感情ニ最モ重キヲ置ク者ナリ華府會議前ノ惡感情ハ次第ニ消滅シ去リ今ヤ兩國ハ好感ヲ以テ結ハレツツアリ自分ハ倫敦會議ニ參列スルニ當リ此ノ良感情ノ變更又ハ減少セサル様是非トモ努メタキ考ナリ此ノ見地ヨリ觀察スルニ先日提示ノ數字ハ米國民ノ心裡ニ壓迫ヲ加フルモノナルコトヲ確信ヲ以テ申上ケサルヲ得ス米國行政部ニ於テモ又大統領ニ於テモ右數字ニ多大ノ失望ヲ禁スル能ハサルモノナリ何トナレハ日本ノ數字ハ米國民モ米國議會モ米國トシテ欲スル所以上ノ増艦ヲ餘儀ナクセラルルニ到ルヘケレハナリ米國ノ輿論ハ兩洋ニ跨ル長キ海岸線ヲ有スル米國ハ一國ノ島嶼ヨリナル日本ヨリモ更ニ大ナル軍備ヲ要スル事ヲ當然トナスモノニシテ從テ日本ニ於テ比率ヲ増シ軍備ヲ増大セントセハ米國モ亦其軍備ノ増大ヲ要求セサルヘカラストノ結論ニ達スル譯ナリ自分ハ會議ニ於テ日本國民ノ自然ノ感情ヲ尊重シ或ハ無理矢理ニ劣勢ヲ押シツケタリトイフカ如キ感想ヲ殘ササル方式ヲ案出シ度キ希望ヲ有スルモノニシテ目下同僚竝ニ顧問トノ間ニ斯ル解決方法ヲ熱心ニ研究シ居ル次第ナリ此見地ヨリ申述ヘ度キハ數字又ハ比率ヲ擧ケ新聞紙上ニ於テ軍縮問題ヲ論議スルコトハ單ニ兩國間ノ感情ノ對抗ヲ誘致スヘキノミナラス満足ナル解決ヲ見出スコトヲ益々困難ナラシムル虞アルノ事實ナリ（此點若槻全權ヨリ日本政府ニ於テモ全然同意見ニテ近來新聞紙ニ現ハレ居ル數字ハ決シテ我方ヨリ出シタルモノニ非ル旨ヲ申入レタルニ國務長官ハ之ヲ諒シ且米國側ヨリ漏レタルモノニアラサル旨ヲ述ヘタリ）然シ乍ラ外部ニ漏洩ノ危險ナキ此席上ニ於テハ數字ヲ擧ケテ御答スヘキカ自分ハ米國民及議會カ二十二萬六千噸ノ巡洋艦勢力ヲ以テ米國ヲシテ對抗の増艦ヲナスノ餘儀ナキニ到ラシムルモノナリトノ考ヲ懷クヘキコトヲ惧ルルモノナリ自分ハ充分ニ熟慮シ又議員タル同僚

ノ意見ヲモ求メタル次第ナルカ此點ニ付テハ自分ノ觀察ノ誤ラサルコトヲ確信スルモノナリト述ヘ

尙潛水艦ニ付テハ米國政府カ商船破壞ニ用フルコトニ強キ反對ヲ有セル旨ヲ說キ餘リニ其噸數ヲ増大スルハ結局戰時法規ニ從ヒ得サルカ如キ狀況ノ下ニ於テ商船攻撃ノ用ニ供スルノ誘惑ヲ感セシムルノ虞アルモノト考ヘサルヲ得ス從テ倫敦會議ニ於テモ華府會議ノ際ト同趣旨ノ條約ノ成立センコト希望ニ堪ヘス而シテ我方主張ノ八萬噸ハ米國民ヲシテ商船攻撃ノ誘惑ニ陷ルノ虞アル數量ナリトノ感想ヲ抱カシムヘシ即此數字ハ嚮ニ申述ヘタル日米間ノ良好ナル感情ニ禍スルノミナラス米國ヲシテ潛水艦ニ對抗スヘキ艦種ヲ多數建造スルノ餘儀ナキニ至ラシムルモノト言ハサルヘカラスト述ヘ尙日本國民ノ感情ヲ尊重スヘキコトヲ繰返シ又倫敦會議ニ於テ胸襟ヲ開キテ解決ニ努力センコトヲ附言セリ

(ロ) 若槻全權ノ説明

若槻全權ハ敍上國務長官ノ所言ヲ諒承シタル上日本ハ英米等ヨリ軍備劣勢ナルノミナラス全ク國防上ノ見地ヨリ保有シ居ルモノナルカ故ニ他國ノ脅威トナルト言フカ如キコト我國民ノ到底想像シ得サル所ナル旨及巡洋艦ノ噸數ハ結局相對的ニ割出サレタル數字ニシテ他國ニ於テ之ヲ低下スレハ日本亦低下シ差支ナキモノナル旨ヲ述ヘタリ

又潛水艦使用制限條約ニ付テハ之カ締結ニ日本ハ賛成ナルカ元來日本ノ主張ハ商船攻撃ノ考慮ニ出ツルモノニアラス劣勢海軍國タル立場上防禦ノ武器トシテ之ヲ必要トスルモノナリト說述シ兩國國民ノ感情ヲ尊重シテ解決ニ達シ度シトノ國務長官ノ所言ニハ全ク同感ナルカ其ト同時ニ日本國民カ何國ヲモ侵ササル比率ヲ要求シ之ヲ認メラレサル場合ニ懷クヘキ感情ニ付テハ充分諒承ヲ願ハサルヲ得ス日本ハ比率ノ増加ヲ言フニアラスシテ釣合ノ惡キ防備ヲ不可トスルニ過キスト說キ本問題ニ付豫メ大體ノ解決ニテモ附ケ得ルニ於テハ會議ニ於ケル決定ヲ容易ナラシムヘキニ付華府及倫敦ニ於ケル今後ノ豫備の交渉ノ繼續ヲ切望スト應酬シタリ

終リニ本日ノ會談カ海軍協定ノ基礎タル一般原則及倫敦會議ノ效果ニ關聯シ華府會議カ齎シタル日米ノ良好關係及右良好關係維持増進ノ方途ニ付討議シ兩國ノ目的ニ付同意成立シ次テ各其立場ノ一般の陳述ヲナシタルモ數字ハ倫敦會議ニ

我方主張
ノ反響ヲ
達控ヘタ
ル理由

於テ取扱フヘキモノナルニ付之ニ論及セザリシ旨ノ新聞共同公表案ヲ作成シ會談ヲ終レリ
右會見ニ於テ我全權ハ我方ノ主張ヲ更ニ繰返スコトラ差控ヘタルカ其ハ我主張ノ反覆カ却テ我態度ヲ弱ムルノ虞モアリ且
既ニ我方トシテ主張スヘキ點ハ全部説明ヲ了セシ次第ナレハ此ノ上ハ主トシテ我カ主張ニ對スル先方ノ意見ヲ聴取シ且主
力艦問題ヲ初メトシテ補助艦全部ニ互ル米國ノ主張並ニ八吋砲搭載巡洋艦以外ノ英米兩國間ノ談合等ヲ聽キ出シタル上適
當ノ機會アラハ佛伊ノ態度並ニ之ニ對スル米國側ノ胸算等ヲモ質問スル心組ニシテ日本ハ今回ノ會議ニ於テハ堂々ト其ノ
要求ヲ主張スルト共ニ飽ク迄協調的態度ヲ以テ會議ノ成功ヲ祈念スルモノナル印象ヲ殘シ且今回話題ニ上リシ重要問題ニ
付テハ本會議前ニ夫々解決センコトラ切望スル次第ナル旨力説シタル上華盛頓ヲ辭去スルノ方針ニ依リタルカ爲メナリ

(三) 大統領トノ會談

一、比率問題

十二月十八日大統領ト晚餐後會談ノ機會ヲ得タルヲ以テ若槻全權ハ我七割ノ主張ハ全ク國民ノ安全感ヲ動搖セシメサル點
ヨリ割出サレタルモノナル次第ヲ述ヘ圓滿ナル解決ヲ來ス様盡力方ヲ切望シタルニ對シ大統領ハ比率ヲ論議スルハ國民ノ
自尊ヲ傷クル虞アリ他ノ「フオーミュラ」ニ依リ解決スルコト然ルヘシト考ヘ居レルカ日本側ニ於テモ其點ヲ考慮セラレタ
リヤト尋ネタルニ付若槻全權ハ日本側ニ於テハ決シテ自尊心ノ見地ヨリ七割ノ比率ヲ主張スルモノニアラス全ク國防ノ立
場ヨリ其必要ヲ確信スルモノナリ而シテ比率ヲ明示セサル具體案ハ之ニ考慮ヲ加フルニ吝ナルモノニ非ルモ結局必要ノ比
率ヲ包含セシメサルヘカサルコトナルヘシト考ヘ居ル次第ナリト答ヘタル處

大統領ハ繰返シ難問題ナリ難問題ナリト云ヒタル後艦種相互間融通案ノ可否ヲ問ヒタルヲ以テ若槻全權ハ融通ヲ認メ差支
ナキモ或艦種ニ付テハ之ヲ餘リ自由ニ動かスコトハ協定ノ精神ニ反スルモノト考ヘ居レリト答ヘタリ

二、食糧船問題

大統領ハ軍縮ノ要點二個ノ中財政的節約ノ點ニ付テハ其根源ハ英國ニアリ英國ニシテ其海軍力ヲ減少スルヲ得ハ米國其他

一九二九年十二月十八日
總統於晚餐後會談
會談大體全權

ノ諸國モ之ニ伴ヒテ軍縮ヲ行フコトヲ得問題ヲ餘程緩和スルコトヲ得ヘシ從テ自分ハ英國ノ國家安全ノ程度ヲ増加スル意
味ニ於テ食糧船問題ヲ提起シタル次第ナリ蓋シ食糧船ノ自由ハ英國ノ如キ(日本モ之ト同様ト思考スルモ)島國ニシテ食
糧ヲ外國ニ仰カサルヘカサル立場ニアル國ニ付テハ國家安全ニ資スル所大ナルヘシト考ヘタレハナリ然ルニ意外ニモ英
國側専門家ニ於テハ之ニ反スル意見ヲ表明シタル趣ニテ失望シ居ル次第ナリト述ヘタルニ付若槻全權ハ日本亦趣旨ニ於テ
食糧船ノ自由ニ賛成ニテ右ハ軍備縮少ニ有利ナル基礎ヲ提供スルモノト考フル旨ヲ述ヘタリ

三、防備及主力艦問題

大統領ハ防備ノ問題ハ比率ノ問題ト緊切ナル關係ヲ有シ離ルヘカサルモノト見居ルモノ多シト述ヘタルニ付若槻全權ハ
日本側ニ於テハ防備問題ハ主力艦ニノミ關係アルモノニシテ補助艦ニ付テハ關係ナキモノト考ヘ居レリ若シ今日防備問題
ヲ論議スルコトナレハ自然主力艦ニ關シ比率ノ問題ヲ論議セサルヘカラス結局華盛頓條約ソノモノヲ根本ヨリ動かスコ
トトナリ甚々難問ヲ生スヘシト答ヘ

尙主力艦問題ニ付日本側ハ艦齡ノ延長、艦型ノ縮小、代換期間ノ延長等ニヨリ之カ縮減ヲ行フコト然ルヘシト考ヘ居ル旨
ヲ述ヘ大統領ノ意見ヲ尋ネタルニ大統領ハ米國ハ一九三六年迄代換ヲ延期セント希望スルモ英國ハ之ニ反對ニシテ成ルヘ
ク工業力ノ關係上製艦ヲ每年平均ナラシムルコトヲ必要ト主張シ居レリ乍然自分ハ之ニ賛セス五年延期ハ經費節約ハ勿論
其期間ニ自カラ事態ノ變更ヲ來シ海軍専門家ニ於テモ主力艦ノ必要ニ付今日トハ別個ノ見解ヲ持スルニ至ルヤモ知レサル
ノ點ニ關シ特ニ重要ト考フルモノナリト語リタルニ付若槻全權ハ全然同意ナリト答ヘタリ

四、潛水艦問題

大統領ハ潛水艦ノ全廢及保有量ヲ極度ニ減少セントスル意見ヲ述ヘタルニ對シ若槻全權ハ日本ハ島國タル關係ヨリ自衛上
威程度即具體的ニ言ヘハ現有ノ勢力ヲ保有センコトラ主張スト答ヘタルニ大統領ハ笑ヒ乍ラ潛水艦ハ最早今日實力ナク飛
行機其他ノ發達ニ伴ヒ數年ノ中ニハ全ク無用ノ長物トナルヘシト云ヘリ之ニ對シ若槻全權ハ日本ハ海洋自由ノ主義ニ賛成

ニシテ單ニ防禦ノ具トシテ之ヲ使用セント欲スルモノナリト答ヘタリ
終リニ若槻全權ハ日本側ノ立場ニ對シ充分好意の考慮ヲ加ヘンコトヲ切望スト述ヘタルニ大統領ハ深甚ナル考慮ヲ加フヘシ要スルニ問題ハ Give and take ニ依テ解決スルノ外ナシト答ヘタリ（尙同月十六日午後兩全權ハ顧問隨員ヲ帶同大統領ニ謁見シタルカ右ハ儀禮的訪問ニシテ實質的意見ノ交換ヲナシタルモノニアラス）

(四) 我主張ニ對スル米國側ノ態度

滯米中兩全權ノ得タル感想ヲ綜合スルニ米國側ニ於テハ豫テ我方ノ主張スル保有量ヲ比率ニ依リテ表示スルハ米國一般ノ輿論竝ニ議會ノ同意ヲ得ルコト困難ナリトシ具體的解決ヲ希望シ居リ我方ニシテ飽迄比率又ハ比率ヲ含ム具體案ヲ固執スルニ於テハ米國ハ一方防備ト比率ヲ關聯セシメテ審議セントスルノ氣勢ヲ示スト共ニ他方造艦ノ決意ヲ仄カシテ我方ヲ牽制セムトスルモノノ如シ

米國側ニ於テハ我方ニ於テ主トシテ財政的考慮ヨリ主力艦代換延期ヲ欲シ居ルモノト推測シ右ニ對シ主義上同意シ乍ラモ直チニ贊成スルコトナク却テ之ニ依リ補助艦艇ニ關スル我方ノ主張ヲ緩和セント試ミツツアルヤニ觀測セラル

國務長官ハ第二回會見ニ於テ米國側ノ立場ヲ説明スルニ當リ「ジョーンス」ヲ列席セシメ且書キ付ヲ携ヘ今日述フル處ハ極メテ重要ナリト前提シ前顯ノ通説述セル處右ハ其ノ内容全然我主張ニ對スル反駁ナリシニモ拘ラス最後ニ本會見ハ甚タ有益好結果ナリシト繰返シ申シ居タルハ先ツ米國海軍側ノ意向ヲ其ノ儘取次クト共ニ尙妥協ノ餘地アルコトヲ仄カシタルモノト觀測セラル右ハ十八日會談ノ際大統領力之ヲ要スルニ Give and take ノ問題ナリト述ヘ居タルニ符合スルモノノ如シ

國務長官トノ會談中同人ニ對シ「モロー」カ兩三回耳打セルヲ見受ケタルカ紐育ニ於テ「ラモン」ハ若槻及財部兩全權ニ對シ今同米國全權中最有力ナルト共ニ其ノ中心ヲナスハ「モロー」ニシテ其ノ大統領ニ對スル信望ノ如キモ寧ロ「スティムソン」ヲ凌クモノアルヲ述ヘ重要案件ニ付テハ同人ト熱議アリ度旨ヲ語リタル次第モアリ旁々同人トノ接觸ニハ特ニ留

意スルノ要アリト認メタリ

米國通過中新聞記者トノ應答ニ際シテハ率直ニ我方ノ立場ヲ闡明スルニ努メタル處米國新聞ハ好意ヲ以テ我所說ヲ忠實ニ記載シタルカ其ノ後十九日ニ至リ一齊ニ出所ヲ示サスシテ日本ハ米國ノ十八隻ニ對シ十二隻ヲ以テ満足スルモノナル記事ヲ揭ケタリ我方ニ於テハ何等右ニ類スル談話ヲ爲ササリシニ拘ラス同記事ノ出タルハ蓋シ米國筋ヨリ何等力爲ニスル所アリテ之ヲ揭ケシメタルニアラスヤト想像セラル（右記事ニ付テハ十九日紐育ニ於ケル新聞記者接見ノ際若槻全權ヨリ明瞭ニ且有力ニ之カ打消ノ説明ヲナシタル處紐育新聞紙ハ忠實ニ右會見談ヲ記載セリ本節（一）（參照）

第五節 兩全權着英後英國當局トノ交渉

兩全權着英ノ際ノ聲明及新聞記者ニ對スル應酬振ハ米國ニ於ケルト同様タルヲ要スルヲ以テ（然ラサレハ我主張ヲ變更シタリト觀察セラルルノ虞アリ）十二月二十七日着英ノ際ノ聲明ニ於テモ將又一月三日新聞記者接見ノ際ニ於テモ全權ノ主張ハ米國ニ於ケルモノト何等異ル所ナシ

兩全權着英當時ハ「タリスマス」休暇中ニテ政府當局ハ悉ク倫敦ヲ離レ居リタル處我全權カ早目ニ到着セルハ會議開會前首相トモ會談シテ出來得ル限リ會議ニ關スル重要問題ニ付意見ノ交換ヲ爲シ度キ考慮ニ基キ居リ又國民ニ於テモ全權到着後ノ行動ニ付深甚ノ注意ヲ拂ヒ居ルニ依リ到着後二週間餘リ何等爲ス所ナク時日ヲ經過セシムルニ於テハ或ハ世人ノ誤解ヲ惹起スル虞ナキヲ保セス依テ首相ニ於テ一月十四日頃迄ニ歸倫困難ナルニ於テハ（十二月二十日首相ハ松平大使ニ對シ十四日頃迄「ロッシーマウス」ニ留マリ度ク其後ノ兩三日連日午後會談スルコトトナシ度キ旨ヲ希望セリ）總理ノ代理トシテ外相ト篤ト會談シ度キ旨十二月三十日松平大使ヨリ外務次官ニ申入レタル處同次官ハ外相及總理ニ其ノ旨傳達スヘク外相ハ健康勝レサルモ一月六日頃歸倫スヘキニ付其ノ節直ニ會談ノ機會ヲ作ル様手配スヘシト答ヘタリ翌三十一日外務省米國局長「クレイギー」ハ首相ニ於テハ兩全權到着ニ際シ關係全部倫敦ニ在ラサルヲ甚タ遺憾トスル旨並若シ日本全權ニ於

英國當局
ト會見ノ
経緯

滯米中兩
全權ノ感
得

ヲ希望セラルルニ於テハ「ロッシーマウス」ハ邊鄙ニテ「ホテル」ノ設備モナク不便ナランモ欣シテ面會スヘキ旨ヲ傳言ヲ申越シタリ然ルニ前記外務次官ト會見ノ際松平大使カ新聞等ニハ我全權「ロッシーマウス」ニ赴クヘキヤノ記事アリタルコトニ言及シタルニ對シ次官ハ右ハ餘リニ廣告的ニ見エ結果却テ面白カラサルヘキニ付吾人ノ執ラサル所ナリト述ヘ且一月二日「クレイギー」亦若槻財部兩全權ヲ來訪シ首相ノ傳言トシテ「絕對靜養必要ノ爲未タ親シク歡迎ノ機會ナキハ申譯ナキ次第ナルカ若シ緊急ナル御用アラハ上京スヘキモ然ラサレハ差當リ外務大臣ニ會見ノ任ニ當ラシメ追テ歸京ノ上悠々御相談致度シ」トノ趣旨ヲ述ヘ外務省側ニ於テハ首相カ十二月二十四日迄毎日十六時間宛モ義務ニ當リ居リ非常ニ疲勞ノ體ニ見エタルノミナラス眼前ニ重要會議ヲ控ヘ今後數ヶ月間ハ休養ノ機會ナキ身柄ナルヲ以テ此際強テ歸京ヲ求メサルコトヲ希望シ居ル旨ヲ述ヘタルニモ鑑ミ我方ノ所見ハ既ニ松平大使ヨリ首相ニ披露セラレ居ルコトニモアリ且既ニ外相トノ會見ヲ申込居ルノミナラス未タ余日モアルコト故此際ハ當方ヨリ強テ會談ヲ申込マサルコト可然トテ往訪ヲ取止メタリ

(一) 外相及海相トノ會見

一、外相トノ會見

綾上ノ經緯ヲ經テ我全權ハ一月七日外務大臣ト會見スルコトトナリタルカ(出席者我方若槻、財部、松平三全權齋藤部長帶同、先方新任「ヴァンシタート」次官同席)右會見ニ於テハ若槻全權ヨリ我七割主張ノ要點ヲ申入レタルノミニ止リ外相ヨリハ何等實質的ナル英國側ノ見解ヲ陳述スルコトナカリキ會見ノ概要左ノ如シ

先ツ若槻全權ヨリ外相カ休暇ヲ切上ケ早目ニ會見セルヲ謝シ我方ニ於テハ成ルヘク早目ニ日本側ノ所見ヲ英國政府側ニ申入レ度キ希望ナリシニ付「マクドナルド」首相ニ對シテハ何レ直接申述フル考ナルモ日本側ニ於テ最モ重要視スル要點ニ付此ノ際一應申入レ置キ度キ希望ヲ以テ來訪セル旨ヲ前置シ軍備縮少ノ大事業ノ爲メ今次會議ヲ招請スルニ至レル英國政府ノ熱誠及努力ヲ賞揚シ日本政府カ會議ノ成功ヲ祈念スル次第ヲ述ヘタル後日本ハ會議ニ對シ單ナル制限ヲ以テ満足セス現實ノ縮少ヲ要望スルモノニテ之カ實現ノ爲ニハ各國特殊ノ國情ニ對シ同情的考慮ヲ加ヘ公平ナル立場ニ於テ

協調的寛容的態度ヲ以テ討議ニ當ルヲ必要ナリト考フルモノナリ今回ノ會議ニ當リ日本ノ最重要視スル問題ニ付テハ會議開催前ノ豫備交渉ニ於テ充分諒解ヲ得置キ度ク(豫備交渉ノ必要ナルハ英國政府招請狀ニモ又我方回答ニモ明記シア爾通ニテ本會議ノ討議ヲ圓滿ニ進行セシムル上ニ最モ重要ト信ス)此ノ目的ヲ以テ松平大使ハ數次英國政府側ト豫備會談ヲ重ネタリ從ツテ我意嚮ノ存スル所ハ英國政府ノ既ニ了知スル所ナルヘキモ其ノ要點ニ付同全權ヨリモ一應申述ヘ度シト前提シ

帝國政府ノ補助艦對米七割要求ノ根據ハ日本カ極東ニ於テ防守的ニ國防ヲ全フセントスルニ外ナラス凡ソ國際間ニ軍縮ノ實ヲ舉ゲントセハ各國カ守ルニ足リ攻ムルニ足ラサル兵力ヲ保有スルコトヲ基準トセサルヘカラス若シ此ノ基準ニ照シテ不満足ノ勢力ヲ無理強ヒセントセハ當該國民ハ其ノ安全感ヲ動カサレ自ラ猜疑心ヲ誘起シ相互信頼ノ念ヲ失ヒ到底軍縮ノ大事業ヲ達成スルコト能ハサルヘシ七割ノ比率ハ華府會議以來我國ノ一貫シテ要求シ來レル所ニシテ今日既ニ國民ノ信念ト成リ居リ此ノ信念ヲ裏切ルカ如キハ吾人ノ到底爲シ能ハサル所ナリ此ノ點ハ日本ノ最モ重キヲ置ク所ニシテ充分閣下ノ御諒解ヲ得タシト述ヘタルニ

「ヘンダーソン」ハ英國政府ニ於テ會議ノ成功ヲ期スル爲メ全力ヲ盡ス考ナル旨ヲ述ヘ次テ各國政府カ其ノ保有スヘキ海軍力ニ付何等カノ最低限度ヲ考ヘ居ルハ當然ト思考ス而シテ七割比率ハ貴說ノ如ク日本國民ノ信念タルコト勿論ナルヘシ只私見ヲ申述フレハ何レノ國モ本會議ニ出席スルニ當リテ一定不動ノ提案ヲ持チ來ラサルコトヲ希望ス之レ會議ヲ成功ニ導ク所以ニアラサレハナリ友誼的精神ヲ以テ會議ニ臨ムコト緊切ニシテ吾人ハ單ニ國家的ノミナラス世界的見地ヨリ重大ナル責任ヲ帯ヒ從テ充分會議ノ重大性ヲ知覺セサルヘカラス但シ今回ノ會議ニ關シテハ主トシテ首相自ラ事ニ當リ居ルニ付貴方ノ御希望ハ首相ニ申入ルルコト然ルヘク首相ヨリ更ニ英國側各全權延イテ英國政府ニ之ヲ傳達スルコトトナルヘシト述ヘタリ

若槻全權ハ會議ニ於テ友誼的精神ヲ持スヘキハ全ク同感ナルモ只我重キヲ置ク原則的事項ニ付テハ恰モ英米間ニ均勢ノ

原則確立シテ爾餘ノ問題解決モ容易トナリタルト同様ノ關係ニアリ我比率ノ原則定マラハ其ノ適用ハ自ラ容易ニ考慮シ得ルニ至ルヘシ從テ今少シ仔細ニ英米政府ノ諒解ヲ得度キモ此ノ點ハ直接首相ニ申入ルルコトスヘシ只我方カ豫備交渉ニ重キヲ置キ居ル趣旨ハ充分御諒解アリ度シト述ヘタルニ

「ヘンダーソン」ハ我方カ單ナル制限ニ止ラス縮減ヲ希望スル一方比率ヲ六割ヨリ七割ニ増加セントスルハ矛盾ニアラスヤト試問セルニ付若槻全權ハ六割ハ主力艦ニ關スルモノニシテ日本ハ華府會議當時ヨリ七割ヲ主張シ居タルカ主力艦ニ付テハ種々ノ關係ヨリ比率ヲ讓リタルモ其ノ他ノ艦種ニ付テハ何等比率決定セス從テ補助艦ニ付テハ現時諸般ノ情勢ニ基キ別ニ比率ヲ定メサルヘカラス而シテ右比率ヲ維持スル限リ日本ハ他國カ其ノ海軍力ヲ低下スルニ從ヒ其ノ海軍力ヲ低下スルノ用意アルモノナリト應シタリ

「ヘンダーソン」ハ更ニ六割ハ主力艦ニ關スルモノナルコト貴説ノ通ナルモ他ノ艦種ニ付テハ何等規定ナク其ノ儘ノ狀態ニテ不戰條約ノ締結ニ及ヘリ右條約締結後ニ至リ更ニ七割ノ比率ヲ主張セラルルハ諒解シ難カルヘシト言ヘルニ對シ若槻全權ハ國防ハ相對的ナルヲ以テ日本ノ海軍力ヲ相對的ニ減少スルハ之ヲ躊躇スルモノニアラス只七割ノ比率ヲ維持スルコト必要ト信ス不戰條約ノ精神ニ基キ軍縮ノ實ヲ舉ゲンコト日本ノ最希望スル所ナルモ相對的立場ハ之ヲ維持セサルヘカラス我七割ノ主張ハ不戰條約ノ關係ナク我國防上是非其必要ト信スル所ナリト答ヘタリ

二、海相トノ會見

一月八日午後「アレキサンダー」海相ト會見ノ運トナリタルニ付若槻財部松平三全權（齋藤部長帶同）同官ヲ海軍省ニ往訪セリ

先ッ若槻全權ヨリ敬意ヲ表スル爲來訪セリト前置シ英國政府ノ多大ノ努力ヲ以テ會議開催ノ運トナレルヲ多トスル旨ヲ述ヘ日本カ會議ノ成功ヲ熱望スルモノナル旨ヲ申入レタルニ對シ海相ハ今回會議ニ於テ壽府會議ノ際ノ如ク日本ノ努力ニ俟ツコト多カルヘシ依テ以テ會議ノ成功センコトヲ切望スト述ヘ若槻全權ハ日本側ニ於テハ協調的精神ヲ以テ會議ニ

一九三〇年一月八日
帝國全權
海相會見

臨ム覺悟ナルモ事國防ニ關スルヲ以テ日本ノ要求スル根本的事項ニ付テハ充分ノ了解ヲ得サルヘカラス之等ノ點ニ付テハ首相初メ英國側當局ニ對シ充分會談シ度シト思考スト述ヘタルニ海相ハ豫備交渉ノ有益ナル旨ヲ答ヘタルニ付若槻全權ハ更ニ豫備交渉ノ目的ヲ以テ早目ニ倫敦ニ來着シ七日外相ト會見シ九日ニハ首相ト懇談ノ機會ヲ得ル次第ニ仔細ニ我立場ヲ申述フル所存ナレハ茲ニ之ヲ申述ヘサルヘキモ今回ノ會議事項ハ閣下ノ管轄ニ屬スルヲ以テ自然今後モ度々會見懇談ノ機會アルヘク又貴我兩國隨員間ニ內談ノ必要モ生スヘク御高配ヲ煩ハスコト多カルヘシト思考スト述ヘ會談ヲ終レリ

（二）英首相トノ會見

初メ英首相ハ一月十四日頃迄休養ヲナスノ豫定ナリシモ成ルヘク速ニ豫備的會談ヲ行ヒ度キ我方ノ希望ニ鑑ミ且兩全權到着以來速ニ歸倫會見セサルコトニ付テ當時日本新聞ノ強キ批難アリ英國諸新聞亦同論調ヲ取ルニ至リタル關係等モアリタルモノノ如ク休養ヲ切上ケテ一月九日歸倫十一日「チエカーズ」ニ於テ我全權ト會談ノコトニ決シタルカ（一月六日）其後右會談ヲ九日ニ繰上クルニ至レリ（十一日ハ社交的會合トナシタリ）

一九三〇年一月九日
帝國全權
海相會見

斯クテ英首相ト我全權トノ會見ハ一月九日、十日及十三日ノ三回ニ分レ行ハレタリ第一回會見ニ於テ英首相ハ比率ナル觀念ハ實際上ハ擴張ヲ意味シ擴張ハ日英勢力ノ接近ヲ意味スト論シ若槻全權ハ之ヲ駁シテ日英勢力ノ接近ハ英國カ小型巡洋艦ヲ重視スルカ爲メナルノミナラス總括的ニ見レハ日英勢力ハ接近スルモノニアラスト答ヘ英首相ニ於テモ必スシモ兩者意見ノ差違大ナラサルヲ認メタルノ觀アリシ處第二回會見ニ於テ英首相ハ大型巡洋艦對米七割ノ英國ニ對スル關係ヲ苦慮スル旨ヲ述ヘ大型巡洋艦十八、十五、十二ノ數ヲ受諾センコトヲ提議シ我方ニ於テ兎ニ角之カ考究ヲ約シタリ第三回會見ニ於テ我方カ英提案ノ受諾シ得サルコトヲ表示スルヤ本件ハ之ヲ即決シ得サル難關タルコト明瞭トナレリ

我全權ハ我方ノ立場ハ右三回ノ會見ニ依リテ一應全部陳述セルヲ以テ兩三日餘裕ヲ取リテ更ニ會見スルコトトナシタル處其後會議開會迄會談ノ機無カリキ但シ專門委員ハ十六日會合シ比率問題ノ討議ヲナシタリ

一月九日
首相官邸
英首相
閣會議
見

「マクドナルド」首相ハ成ルヘク速ニ豫備會議ヲ行ヒ度キ我方ノ希望ニ鑑ミ休暇ヲ切上ケテ倫敦ニ歸リ一月九日首相官邸ニ於テ我全權ト會見セリ（我方若槻、財部、松平三全權、齋藤部長帶同先方首相及「クレイギー」同席）其内容左ノ如シ

(イ) 比率ト均衡

先ツ若槻全權ヨリ我方ニ於テ會議ノ成功ヲ切望スルコト、豫備交渉ヲ重視スルコト及愈々會議モ近キタルニ付松平大使ヨリ申述ヘタル事柄ナルモ同全權ヨリモ更ニ日本カ最重キヲ置ク原則的事項ニ付申入レ度キ希望ニテ來訪セリト述ヘ外相ニ對スルト同シク我國カ米國海軍ノ七割ヲ保有セント主張スルモノナル所以ヲ詳述シ松平大使ヨリモ豫テ充分申述ヘタルモ重ネテ其好意的考慮ヲ希望スル旨ヲ述ヘタルニ對シ英首相ハ日本側ノ立場ニ付テハ充分ノ考慮ヲ拂ヒ來レリ只右ニ關シ申述ヘ度キ二點アリ第一ハ日本側ニ於テハ單ニ海軍力ノ制限ノミナラス縮減ヲ主張セラルル處其七割主張ト調和スルコト甚タ困難ナルヘシト云フ點ニアリ例ヘハ米國カ二十一隻又ハ十八隻ノ大型巡洋艦ヲ保有スルコトナラハ日本ハ其七割ヲ要求セラレ從テ擴張ノ結果トナルヘシ之レ太平洋ノ事態ヲ機微ノ關係ニ置クモノト云ハサルヘカラス此ノ故ニ寧ロ比率ノ問題ヲ離レテ釣合（「エクリブリウム」）ノ問題トシテ考慮ヲ加ヘタシト考フル所以ナリ即チ何艦種ニ付テハ何隻ト云フカ如キ目安ヲ立テ國防ノ安全ヲ考フル方然ルヘク英米間ニ於テハ此見地ヨリ協定ヲ求メタリ斯ノ如クシテ日本ノ輿論ヲ満足セシムルコトヲ得ヘキニアラスヤト考フ英米間ニ於テハ所謂均勢ノ問題ハ之ヲ論スルコトナク唯事實ニ基キテ製艦計畫ヲ比較論議シタル次第ナリ畢竟戰爭ヲ出發點トシテハ協定ノ餘地無ク平和ノ狀態ニ於テ最小限度ノ海軍力ヲ如何ナル程度ニ置クヘキヤニ付テ考慮ヲ廻ラセリ仍テ日本ニ於テモ斯ノ如キ見地ヨリ最小限度ヲ計出シ比率ニ言及セザランコトヲ希望ス比率ニ基キテ立論スル時ハ結局造艦競争ヲ誘致スルコトナルノ虞アリ此ノ故ニ釣合ノ論ヲ主張スルモノナリ加之比率ノ論據ニ依ルトキハ佛伊等モ亦夫々主張ヲ申出ツヘク結局英國ノ製艦計畫ハ根柢ヨリ覆サルノ虞アリ從テ日本側カ比率ヲ離レタル數字ニ依リ立論センコトヲ切望スルモノニシテ其裏面ニハ或ハ七割或ハ六割八分

英首相
閣會議
見
英首相
閣會議
見
英首相
閣會議
見

ト云フカ如キ比率ヲ包藏スルコトナルモ然ルヘシ日本カ國防上必要トスル實際ノ數字ヲ本トシテ研究スルコト必要ナリト思考スト述ヘタリ茲ニ於テ若槻全權ハ釣合ヲ立論ノ根據トナスヘキコトニ付テハ全然同感ナリ日本カ七割ヲ主張スルハ其意味ニ外ナラス日本ハ軍備ヲ相對的ナリト考フルモノニシテ釣合ヲ維持スル限り如何ナル縮少ヲ行フモ差支ナシトナスモノナリ大型二十一隻ニ對シ七割ヲ要求スルトキハ擴張トナルノ虞アリトコトナレトモ同時ニ小型ニ付テハ保有量自カラ減少シ巡洋艦全體ヨリ之ヲ見レハ依然釣合ヲ維持スルモノト云ハサルヘカラス比率ナル言葉ヲ避ケントスル趣旨ハ必シモ之ヲ否定セサルモ相對的軍備ヲ實現セントセハ自ラ全然比率ノ觀念ヲ脱スルコト能ハス然レトモ比率ナル言葉ヲ避ケントスルニハ異議無ク從テ過般日本政府ハ松平大使ヲ通シテ其必要トスル隻數ヲ英國政府ニ通達セリト述ヘタリ

(ロ) 大型巡洋艦ニ關スル日英勢力ノ接近

次テ若槻全權ハ日本ノ提案カ大型巡洋艦ニ付日本ノ勢力ヲ英國ノ勢力ニ餘リニ接近セシムトノ點ニ言及シ是レ英國カ小型巡洋艦ノ多數ヲ要求シ大型ハ劣勢ニ甘ンスルニ反シ米國ニテハ大型ノ多數ヲ要求シ小型ノ劣勢ヲ受諾セル自然ノ結果ト云ハサルヘカラス日本トシテハ大型ニ重キヲ置ク關係上英國ニ對シ同艦種ニ於テ七割以上ヲ保有スルコトナルモ巡洋艦全體ニ付テ觀察セハ英國ニ對シ遙ニ劣勢ナリ日本ハ由來補助艦全體ニ對シ七割ヲ主張スルモノナルモ問題ヲ簡單ニスル爲假ニ巡洋艦ノミニ付數字ヲ擧ケンニ米國ノ保有量三十一萬五千五百噸内一萬噸巡洋艦十八萬噸小型巡洋艦十三萬五千五百噸ヲ基準トスレハ日本ノ小型巡洋艦保有量ハ九萬四千八百五十噸トナリ之ヲ英國ノ十九萬二千二百噸ニ比較スレハ僅ニ四十九「パーセント」ニ過キス之レ英國側ニ於テ小型ニ重キヲ置ク特殊事情アルニ基クモノニシテ我方ニ於テハ大型ヲ重視セサルヘカラス事情アルカ爲自ラ免レ難キ所ナリト云ハサルヘカラス要スルニ各國保有量ハ大小巡洋艦ヲ合併シテ考量セサルヘカラス英米ノ所謂均勢モ此見地ヨリ考量セラレタルコトト諒解ス而シテ我巡洋艦總括的保有量ハ前述ノ假定ニ依レハ英國ニ對シ六割五分ニ過キサルモノナリ加之其内容ヲ檢スレハ日本ノ大型巡洋艦ハ將來十三隻過渡

期十四隻ノ要求ニシテ將來ノ十三隻ハ其總噸數十二萬六千噸ヲ超ユルコト無ク從テ一萬噸級巡洋艦トシテハ十一隻ヲ超ユルコト無カルヘシ又過渡期ニ於テハ一萬噸級ハ唯八隻ノミニシテ他ニ舊型劣勢ノ古鷹級四隻アルモ之ハ英國ノ「ホーキンス」級ニ比スヘキモノナリ而シテ假令八千八百噸ノ大型巡洋艦二隻ヲ追加スルモ是レ英國ノ「ヨーク」型ト相匹敵スルモノニシテ總體的勢力トシテ遙ニ英國ノ下位ニアルハ事實ナリ而モ英米兩國ハ今後累年新艦ノ建造ヲ見ルヘキニ拘ラス日本ハ今後多年間多數ノ舊艦ヲ保有セサルヘカラサル實情ニアリ要之日本ハ各國保有勢力ノ比較上大型ノミヲ切離シテ檢討セントスルコトニハ同意ヲ表スルコト能ハス大小巡洋艦一併ニ考慮シ且其實力ヲ審査シテ公正ナル結論ヲ求メサルヘカラスト信ス比率ヲ離レテ隻數噸數等ニ付合ヲ考フル様希望アリタルニ對シ松平大使ヨリ帝國政府ノ所見ヲ披瀝シ之ニ對シ貴方ノ批評アリタルコトヲ承知シタルニ付右一言ヲ申述ヘ考量ヲ煩ス次第ナリト述ヘタリ

英首相ハ若槻全權ノ説明ニ依リ日英間ニ意見ノ開キ少キコトヲ觀取セリ我方ニ於テハ釣合ヲ要求シ貴方ニ於テハ比率ナル言葉ヲ使用セラレントス余ハ比率ナル語ヲ拋擲セラレト言ハント欲ス貴方ノ困難ハ充分之ヲ諒承スルモ英國ノ難點亦茲ニアリ余ハ率直ニ申上クレハ誠ニ苦シキ立場ニ立ツ次第ナリト述ヘタリ

次テ英首相ハ第二點トシテ我方ニ於テ恰モ英國カ八吋砲巡洋艦ニ對シ無關心ナルカ如キ所見ヲ述ヘタリトテ右ハ全ク實情ニ反スルモノナリ英國トシテハ深ク研究ヲ加ヘ今日ノ世界ノ實狀ニ於テハ是非共五十隻ノ巡洋艦ヲ必要トストノ結論ニ達セリ而シテ英國ハ今日戰爭ヲ目標トセス平和の協定ヲ念頭ニ置クカ故ニ八吋砲型十五隻ヲ以テ満足セントスルモノナリ此見地ヨリスレハ日本カ八吋砲型ニ於テ勢力大ナルモ六吋砲型ニ於テ勢力少キヲ以テ日英間ノ釣合上差支ナカルヘシト言ハル趣旨ニハ左袒スルヲ得ス日本側ニ於テハ大型ノ一噸モ小型ノ一噸モ同價值トナシ居ラルルカ如キモ其間ニ差違アルコトヲ認メサルヲ得ス之ヲ要スルニ日英兩國間ニハ尙其立場ヲ異ニスル點アルモ之レ決シテ解決シ難ク打勝チ難キモノニアラサルコトヲ看取ス今日ノ會談カ大ニ有效ニシテ且事態ヲ鮮明ナラシメタル事ヲ多トスト述ヘタリ

仍テ若槻全權ハ今日仔細ニ數字ヲ舉ケタルハ日本ノ勢力カ英國ノ勢力ニ近似スルモノニ非ルコトヲ明カニシ置度キ趣旨

ニ外ナラスシテ決シテ英國ニ於テ八吋砲型ヲ輕視シ居ラルルトノ趣旨ヲ含ミタルモノニアラス要スルニ日本ハ比率隻數何レカ一方ニ執着スルモノニアラスシテ唯貴説ノ如ク釣合ヲ必要ト考フルモノナリ日本ハ唯其安全感ヲ滿サレサルコトヲ懸念シ居ルモノニ過キスシテ英米ニ對シ劣勢ニ甘ンスルモノナルニ拘ラス何故ニ倫敦會議ニ於テ此穩カナル主張力承認セラレサルヤ是レ國民ノ了解シ得サル所ナルヘシ此點ニ關スル我國民ノ焦慮ハ充分御了解アラント切望スト述ヘタリ

「マクドナルド」ハ貴見ハ明ニ之ヲ了解セリ双方ノ立場カ明瞭トナリタルハ眞ニ喜フ所ナリ尙此上トモ双方ニ於テ他方ノ主張ニ對シ考慮ヲ廻ラシ諒解ノ進マンコトヲ切望スト述ヘ終リニ八吋砲型ハ六吋砲型ト全ク其性質ヲ異ニシ一噸ノ價值モ自ラ同シカラサルコトヲ力説シ度シト繰返シタルニ付若槻全權ハ我方ニ於テモ全然同意見ニシテ八吋砲型ニ特ニ重キヲ置クハ此ノ理由ニ依ルモノナル旨ヲ答ヘタリ

次テ英首相ヨリ更ニ會談ノ機ヲ得度シト希望シ十一日「チニカーズ」ニ於ケル會合ハ純然タル社交的ノモノナルニ付十日午前十時半ヨリ正午迄再會スルコトナレリ

尙右會談中我方ノ具體案ニ付豫テ英國側ノ開示セル難點ニ對シ數字ヲ舉ケテ反駁シタル部分ハ豫メ左ノ心覺エノ書付ヲ作成シ置キ之ヲ英首相ニ手交シタリ

THE NUMERICAL RELATIONS OF JAPAN'S CLAIM IN RESPECT

OF THE CRUISER STRENGTH.

What Japan desires to hold is the minimum naval strength sufficient to eliminate menace to her national safety. She purposes no aggression; she only wishes that security should be ensured her in the adjacent waters of the country. This is a fact, clearly evidenced by her readiness to possess a naval strength inferior to that of the British Empire or of the United States.

八吋砲巡
洋艦ニ關
スル全權
ノ主張

一九三〇年
一月九日
英首相會
見英海軍
大臣

It appears, however, that His Britannic Majesty's Government do not see their way to accepting the Japanese claim in the light of the particular phase of the question that the strength Japan proposes to hold in the 8-inch gun or large type cruisers would approximate the British strength in that category.

The Japanese point of view in this connection will be submitted in detail in the following paragraphs.

1. It is an unavoidable fact that the strength which Japan proposes to possess in the large type cruisers would be more than 70 per cent. of the holdings of the British Navy, as a result of Japan's desire to possess 70 per cent. of the American strength in that category.

But, on the other hand, computing on the hypothesis that the American cruiser strength will stand at 315,500 tons, comprising 180,000 tons for the large type cruisers and 135,500 tons for the small type, i. e. 6-or-less-than-6-inch-gun cruisers, the Japanese share for the small type cruisers at 70 per cent. would be 94,850 tons. Comparing these figures with the British allotment in that class of ships, standing at 192,200 tons, the Japanese holding would register only 49 per cent.

(The hypothetical figures above referred to are those of what is understood to be the Anglo-American provisional agreement, which, it is the earnest wish of Japan, will still be reduced so that the Japanese figures may accordingly be lowered. It may be added, moreover, that while Japan desires to own 70 per cent. in the auxiliary craft as a whole, the cruiser strength only has been considered in the above calculation for the sake of simplicity.)

Such is a natural conclusion arising from the circumstances that, on the one hand, the British Empire is in a special position to lay emphasis upon the small type of cruisers and, upon the basis of the Anglo-American parity, would be satisfied with a strength smaller than the American holdings in ships of the large type class, and on the other, Japan is so circumstanced as to attach great importance to the large type cruisers.

2. Further, when the large type and small type cruisers are taken together, as was undoubtedly the case when the principle of parity was applied to the British and American navies, the Japanese holdings in the gross cruiser strength would constitute only 65 per cent. of that of Great Britain.

3. Moreover, when close examination is made into the actual strength of the Japanese holdings as proposed, its intrinsic inferiority will become apparent, as described in the following items:

(a) Japan's claim in respect of 8-inch gun cruisers is fourteen ships in the transitory period, and eventually thirteen. This claim is based upon the assumption that the United States is to possess 18 cruisers of the 10,000 tons class or a total tonnage of 180,000. And since the total tonnage of the thirteen 8-inch gun cruisers which Japan purports eventually to possess will not exceed 126,000 tons, her holdings in the 10,000 ton cruisers will not exceed eleven in number. As regards the transitory period, Japan would hold eight 10,000 ton cruisers and four cruisers of the Furutaka class which are of an old type and of inferior strength, comparable to the Hawkins class. And even if she were to hold in addition two 8-inch gun cruisers of the 8,800 ton type, these latter being comparable to the York class, the strength in 8-inch gun cruisers which Japan would thus possess would be far inferior to that of Great Britain.

(b) Japan's holdings in small cruisers, as has already been set forth, will be far inferior to that of Great Britain. The British and American navies, moreover, are to build many new ships for the coming years while Japan will be forced to retain many old-type ships for several years to come.

It is therefore apparent that the inferiority of the Japanese strength in the cruisers will be more pronounced during the transitory period, so much so that some arrangement will have to be sought to meet the situation.

For the reasons given above, Japan cannot subscribe to the idea of examining the large type cruisers separately and independently as a means of comparing holding strengths. In order to reach a just and fair conclusion, she deems it essential that the large and small type cruisers be considered together and their actual strength scrupulously examined.

二、第二回會見

十日首相官邸ニ於テ第二回會見ヲ行フ（我方若槻、財部、松平三全權齋藤部長帶同、先方首相「クレイギー」同席）内容左ノ如シ

(イ) 對米七割ノ對英影響

英首相ハ（若槻全權カ主力艦問題等ヲ討議センカ爲口ヲ開カントシタルヲ遮リ）我方覺書ニ對シ昨夜深更ニ及ヒ深甚ノ考慮ヲ加ヘタルカ其要點ハ日本側ニ於テ國防ノ見地ヨリ米國ニ對スル七割ノ比率ヲ要求セラルルモノニシテ英國トハ直

一九三〇年一月十日
日英首相會見
第二回會見
見
對米七割ノ對英影響
英首相ハ（若槻全權カ主力艦問題等ヲ討議センカ爲口ヲ開カントシタルヲ遮リ）我方覺書ニ對シ昨夜深更ニ及ヒ深甚ノ考慮ヲ加ヘタルカ其要點ハ日本側ニ於テ國防ノ見地ヨリ米國ニ對スル七割ノ比率ヲ要求セラルルモノニシテ英國トハ直

接關係ナク英國側ハ比率ヨリモ比率ノ結果ヲ重視スルモノナリ日本カ七割ノ主張ヲ固持スル時ハ米國ノ新聞ハ勿論英國ノ新聞モ亦日本カ比率ノ増加ヲ要求スルモノトシテ一般ニ惡影響ヲ與ヘンコトヲ恐ルルモノナリ巡洋艦勢力ニ於テ日本カ二十萬六千噸ヲ二十二萬六千噸ニ増加セントスルハ自ラ輿論ヲ刺戟スルノ虞アルモノト憂慮スル次第ナリ猶右覺書ノ末段ニ於テ大型及小型巡洋艦ヲ併合シテ考慮セサレハ公正ナル結論ニ達スルヲ得ストノ趣旨ヲ述ヘラレタルモ日本カ米國大型巡洋艦ニ對シ七割ヲ要求セラルルコト夫自身大型及小型ヲ區別シ大型ニ對シ特別ノ考慮ヲ加ヘラレタルモノニ外ナラサルヘシ日本ノ主張ヲ徹底セシムル爲ニハ右兩型ノ間ニ何等カノ尺度ヲ設ケテ比較ヲ取ラサルヘカラスト述ヘタルニ付

若槻全權ハ日本トシテハ決シテ米國海軍ヲ特ニ目當トシテ論スル事ヲ欲スルモノニアラサルモ八吋砲型ハ特別任務ヲ有シ從テ日本ノ重キヲ置ク所ニシテ國防ノ見地ヨリ又國民ノ信念ニ鑑ミ七割ヲ必要トスル結果自然覺書ノ如キ數字ヲ割出ス事トナリタル次第ナリ米國ノ保有量カ低下シテ從テ日本ノ保有量カ低下センコトハ我希望シテ措カサル所ナリ現在覺書ニ計上シタル數字ニテモ英米海軍力ヨリ遙ニ劣勢ナリ

尙大型小型ヲ併合シテ考ヘントスルニ當リ噸當リノ價值ノ異ルコトニ關シテハ全ク同感ナリ大型小型ノ融通ニ當リテハ尺度ヲ定ムルコト必要ナルヘシ只差當リ尺度ノ適當ナルモノナキカ爲凡ソノ數字ヲ擧ケテ假ニ日本ノ要求通決定スルモ日本ノ勢力ハ決シテ英國ノ勢力ニ接近スルモノニ非ルコトヲ明ニセンカ爲書付ニ認メテ貴覽ニ供セルニ過キスト述ヘタリ

(尙九日日本ノ欲スル所ハ縮減ナルニ拘ラス七割ヲ要求スルハ矛盾ノ嫌アリトノ御話アリタルカ日本側ニ於テハ七割ノ鈎合ヲ維持スル事ヲ重要ト考フルモノニシテ其ノ維持セラルル限り他國カ保有量ヲ低下セハ從テ我保有量ヲ低下スルニ躊躇セサルモノニテ決シテ矛盾スルモノニ非スト附言セリ)

次テ「マクドナルド」ハ八吋砲型ハ最重要有力ナル艦種ニシテ六吋砲型ハ第二段ノ地位ニ立テリ英國ハ八吋砲型ニ於テ十四萬八千四百噸ヲ其保有量ト認メ居レルカ日本カ對米七割即十二萬六千噸ヲ要求セラルルトセハ英國ニ對シ八割五分ノ比率ニ立ツコトトナル計算ナリ之ヲ六吋砲型及驅逐艦ノ噸數小ナル故ヲ以テ鈎合ヲ取ルモノナリトナサルモ不合理ニ陷ルノ虞アリト述ヘタリ

若槻全權ハ之ニ對シ日本ハ英國ニ對シ大型ニ於テ決シテ八割以上ヲ保有セント考フルモノニアラス若シ英米ニシテ右艦種ニ付平等ノ保有量ヲ主張セラルルニ於テハ日本ハ勿論對英七割ヲ以テ満足スヘシ我方トシテハ國防ノ見地ヨリ米國カ十八隻ヲ保有スル以上之ニ相當ノ比率ヲ維持スルコトヲ必要トスルニ過キスシテ決シテ英國ノ勢力ニ接近センコトヲ冀フモノニアラスト述ヘタリ

「マクドナルド」ハ苦痛トスル所ハ英國ノ代表者トシテ日本ノ巡洋艦ニ於ケル保有量カ英國ノ勢力ニ對シ八割五分ノ高率ニアルコトヲ説明スルニ困難ヲ感スル點ニアリ英國ノ海軍力ハ大西洋、北太平洋、南太平洋ノ三艦隊ニ分割スルヲ要シ之ヲ一勢力ニ集中スル能ハサル事情ニアリ此點ニ於テモ亦問題ノ紛糾ヲ來ス次第ナリ日本カ其保有量ヲ考慮スルニ當リ動機ノ純正ナルハ疑フ所ニアラサルモ此ノ困難ハ之ヲ諒トセラレタシト述ヘタリ

若槻全權ハ之ニ對シ余モ亦同シタ苦シキ立場ニアリ若シ我方ニ於テ對英七割ヲ保有スルコトナラハ米國ニ對シテハ頗ル低率トナリ國防上甚タ不十分ナルヲ以テ不得已對米七割ヲ主張スルモノニシテ決シテ英國ニ迫ラントスルモノニアラス英米協定カ今吾人ノ諒解スル如クナル以上日本代表トシテ不得已其主張ヲ固持スルモノナリト言ヒタルニ

(ロ) 英首相提案

「マクドナルド」ハ我方ノ困難ナル地位ハ充分ニ之ヲ認メ要スルニ双方共難局ニ立テリ何等カ妥協ノ途發見ノ爲努力スルノ外ナキヲ以テ一案ヲ記錄ニ止メ我方ノ充分ナル考慮ヲ煩シ度シト英國側ニ於テ此見地ヨリ大型巡洋艦日英米ノ保有隻數ヲ十二、十五、十八トナス案ヲ提唱セントスコレ未タ米國ノ承諾ヲ經ス英國ノミニ試案ナレトモ此案ニ依レハ日本ノ英國ニ對スル比率ハ隻數ニ於テ八割、噸數ニ於テ七割四分トナルヘシ又右案ニ付テノ他ノ重要ナル一方面ハ英國ノ一

大型巡洋艦ニ對シ
日英米
十二、十五、十八

若槻全權ハ右六割六分三分ノ二ナル計數ハ十八萬噸、十二萬噸トシテ計出セラレタル餓ナリヤト尋ネタルニ「マクドナルド」ハ余ハ唯隻數ヲ考慮シタルモノナリト答ヘタリ若槻全權ハ之ニ對シ右提案ハ我方ニ於テ慎重ノ研究ヲ要スル次第ナルカ折角ノ御注文アル以上研究ノ標準ヲ得度ク從テ數字ヲ確メント欲シタル次第ナリト附言セリ

(ハ) 主力艦問題

次テ若槻全權ハ主力艦問題等ニ關シ會議ニ於ケル英國側ノ態度ヲ聽キ又我方所見ヲモ開陳シ度シト述ヘ「クレীগー」
之ニ對シ右ハ既ニ我方隨員ニ申入レ濟ナルカトテ英側態度ヲ略述セリ

財部全權ヨリ英國政府ニ於テハ主力艦ノ代換開始期ハ之ヲ延期スル意嚮ナリヤ又ハ條約ノ規定通一九三一年ヨリ開始ス
ル意嚮ナリヤト尋ネタルニ英首相ハ其點ハ英國ニ於テ未タ決定シ居ラス會議ノ協定ニ依ルヘキモノト考ヘ居レリト答ヘ
タリ

若槻全權ハ假ニ所謂英米假協定ノ數字ヲ基礎トシテ補助艦ニ關スル決定ニ達シタリトスルモ實ハ國民ノ負擔ニ付テ考フ
レハ日本ハ餘リ輕減トナラス米國ハ新ニ建造スルカ故ニ増加トナルヘク英國モ亦餘リ輕減トナラサルヘシト想像セラル
反之主力艦ニ就キテ其代換ヲ延期シ艦型ヲ縮少スルカ如キ協定ヲ得ルニ於テハ財政の負擔ノ上ヨリ多大ノ輕減ヲ見ルヘ
シト思考スルモ此點ニ關スル英國ノ所見如何ト尋ネタルニ英首相ハ主力艦ニ關スル協定ニ依リテ負擔ノ大輕減ヲ實現シ
得ルコトニ付テハ全ク御同感ナリ主力艦艦型ニ變更ヲ來サハ一隻ニ付二百萬磅ノ節約ヲナシ得ヘク其上艤裝及人員ノ上
ヨリ見テモ縮減ヲ見ルコトトナルヘシト考フ乍倂巡洋艦ニ付テモ亦多大ノ輕減ヲ見ルモノト言ハサルヘカラス何トナレ
ハ萬一協定ニ達セサルニ於テハ必然ノ結果トシテ高價ナル製艦競争ヲ馴致スヘケレハナリト言ヘリ

斯クテ十三日午後二時半再會スルコトニ決定シ散會セリ

三、第三回會見

(イ) 英國提案ニ對スル我見解
一月十三日首相官邸ニ於テ第三回會見（出席者前回同様）ヲ行フ内容左ノ如シ

若槻全權ハ前四十八、十五、十二ノ試案提示ニ預リ之ニ付テハ充分考慮ヲ加ヘタルカ右試案ノ通ニテハ我方カ重キヲ置
ク大型巡洋艦ニ付最強海軍國トノ間ニ釣合ヲ得サルコトナルハ皆意見ヲ同ウスル所ニシテ余ハ右ニ贊意ヲ表スルヲ因
難トス今ヤ倫敦會議開催期ノ切迫ニ從ヒ日本國民ハ其焦慮ヲ加ヘ新聞紙モ七割ノ必要ヲ強調シ居レリ余ハ必シモ七割ヲ

表面ニ表ハサンコトヲ欲スルモノニアラス隻數又ハ噸數ニ依リテ協定スルモ可ナリト思考スルモ唯鈞合ノ維持ハ之ヲ必要トセサルヲ得ス鈞合宜シカラスハ國論ノ容認ヲ得難ク余ハ國論ヲ無視シテ意見ヲ定ムル立場ニアラスト述ヘタルニ首相ハ先ツ英國提案ニ關シ國論ニ對スル若槻全權ノ立場ニ同情ノ意ヲ表シタル後本問題ニ付自ラ陷レル大ナル「デレムマ」ハ日本ハ英國ヲ目標トセス他國ヲ目標トシテ其海軍力ヲ定メムトシ居ラルルモ英國トシテハ其結果ニ付無關心ナル能ハス余ノ考ヘニテハ米ノ十八ヲ基準トシテ日本ノ十二ヲ考フレハ其保有スヘキ量ハ日本ノ要求セラルル比率ニ比シ僅カニ三分三分ノ一ノ差アルニ過キス又英國トシテハ日本ノ保有量カ其八割ニ達スルヲ苦痛トスルモノナリコレ英帝國國論ノ許ササル所ニシテ英國政府ノ承認シ能ハサル所ナリト述ヘタリ

又首相ハ後刻航空母艦問題話合ノ折更ニ本件ニ言及シ巡洋艦問題討議ヲ離ルルニ先立チ日本全權ニ於テ明確ニ日英双方ノ立場ヲ諒解セラレンコトヲ希望ストテ日本側ニテハ一國ヲ目標トシテ七割ヲ主張セラルルモ右ハ英國ヨリ見レハ十割トモ九割トモナル場合アルヘキニアラスヤ又若シ英國トシテ日本トノ協定ヲ遂ケントセハ勢ヒ自國ノ持分ヲ増加セサルヘカラス然ラハ米國ニ於テ更ニ高率ヲ要求スヘク此ノ如ク三縮ミノ態トナルハ誠ニ不幸ナル關係ニアルモノト云ハサルヘカラスト述ヘタルヲ以テ若槻全權ハ英米間ニ均勢認メラルルニ不拘我方ニ於テ其一方ニ對シ所要比率ヲ得ムトスレハ他方ニ難色アリ斯クシテ解決ニ達シ難キハ大イニ遺憾トスル所ナリト言ヘルニ首相ハ之ニ對シコレ全ク「mathematical impossibility」ニシテ單ナル外交問題ニアラス誠ニ困難ノ至リナリト述ヘタリ

(ロ) 主力艦問題

若槻全權ハ主力艦ノ艦型縮小及艦齡延長ニ關シ日英ノ意見相接近シ又備砲口徑ノ縮小ニ付テモ主義上意見一致セルヲ欣ビ唯口徑ニ付英國案ノ如ク之ヲ十二吋トナスハ餘リ急激ニシテ贊同シ難ク現存ノ十六吋ト十二吋トノ中間ニ適當ノ制限ヲ設クルコト然ルヘシ尙代換ニ付テモ英國カ延期ノ意見ナルハ財政的及平和的の見地ヨリ我方ノ歡迎スル所ニシテ日本ハ五年位ノ延期ヲ然ルヘシト考ヘ居レリト述ヘ首相ノ意見ヲ尋ネタルニ首相ハ一個人ノ思ヒ付トシテ其隻數減少ノ案ニ對

主力艦
艦型縮小
及艦齡延長
問題

スル我贊否ヲ問ヒ主力艦カ海軍力ノ中核ヲ爲シタルハ既ニ過去ニ屬ストノ意見ヲ抱懷スルモノ多キコトヲ指摘シ今回ノ會議ニ於テ主力艦ノ全廢ヲ提議セントスルモノニハアラサルモ假ニ英國ノ保有隻數ヨリ五隻ヲ減シタル場合日本ハ其比率ヲ保チテ之ヲ低下スヘキヤ其點ニ關スル日本ノ意嚮ヲ聞カンコトヲ欲スト述ヘ又艦型縮小及艦齡延長ニ付テハ日英間大體意見一致セリ尙代換ニ付英國ハ相當ノ延期ニ贊意ヲ表スルモ唯日米何レモ英國ヨリモ多ク新艦ヲ保有スル關係上長キニ過クル延期ハ同意シ難シ更ニ備砲口徑ニ付テハコレ艦型ト密接ノ關係アルモノニシテ二萬五千噸ノ戰艦ニハ十二吋以上ノ砲ヲ搭載スル能ハス、日本ノ主張タル十四吋ナラハ三萬噸ヲ要スヘク其ニテハ現在ノ三萬五千噸ニ比シ減少量少キヲ恨トスト述ヘ且以上ノ諸點ハ専門的知識ナケレハ海軍省ノ意見ヲ取次キ居ルモノナリト附言セリ

若槻全權ハ主力艦ノ縮小ハ熱心ニ支持スル所ナルモ隻數ノ減少ニハ贊意ヲ表シ得ス華盛頓ニ於ケル五、五、三ノ比率ハ事實日本國民ニ不安ノ念ヲ與ヘタルモノニシテ數量大ナル場合ニ於テハ猶防衛ノ見込ナキニアラサルモ其隻數下ルニ於テハ實力ノ比較取レス危險ヲ感スルニ至ルヘケレハ隻數ノ減少ハ國論ノ一致シテ否認スル所ナリ備砲口徑ニ付テハ日本側專門家ハ十四吋砲カ二萬五千噸型ニ搭載セラレ得ルヲ認メ居レル旨ヲ述ヘタリ

(ハ) 航空母艦問題

若槻全權ハ次テ航空母艦ニ付テハ日本ハ略一萬六七千噸位ニ低下シテ然ルヘシト考ヘ居レリ尙現在ハ一萬噸以下ノ母艦ニ就テハ制限無キモ補助艦ニ制限ヲ加フル以上此點モ問題トセサルヘカラス我案トシテハ之ヲモ併セテ華府條約ノ制限量内ニ組入ルル事ト致シ度シ然ラスンハ飛行機ノ益々發達セントスル氣運ニ鑑ミ母艦モ飛行機ト併セテ建造競争ノ目的物トナルカ如キ事アラハ誠ニ遺憾ノ至リナリト述ヘタルニ

首相ハ大體右趣旨ニ贊意ヲ表シ母艦ニ關スル英國案ハ單艦最大噸數二萬五千噸英國保有量十二萬五千噸ナリ貴説ノ如ク一萬噸以下ノ母艦ヲ此噸數ニ組入ルルコト誠ハ然ルヘキカト存ス(此點ハ若槻全權ヨリ念ヲ押シタルモ英國側ハ必スシモ一萬噸以下ノ母艦ヲ日本ト同シ意味ニテ母艦總保有量中ニ組入ルルモノナリヤ否ヤニ付回答依然不明瞭ナリシカ首

航空母艦
艦型縮小
及艦齡延長
問題

相ヨリ「クレイヤー」ト雜談ノ形ニテ英國海軍ハ將來母艦代換ノ際ハ一萬噸以下ノモノヲ作ラサル一應ノ意嚮ナル旨ヲ申述(ヘタリ)日本ハ一萬六千噸迄艦型ノ縮小ヲ提唱セラルル處英國ハ二萬二千噸型四隻ヲ有ス日本ノ提議ハ代換後ノ話ナリヤ又艦齡ハ二十六年トシ度キ希望ナルカ日本側ハ如何ト尋ネタリ

若槻全權ハ日本側ニモ亦二萬七千噸型母艦二隻アリト記憶ス之カ縮小ハ將來代換ノ際ヲ意味スルモノニシテ一應意見ヲ申述ヘタル次第ナリ又艦齡ニ付テハ大體英國案ニ賛成ナリト言ヘリ

(二) 驅逐艦問題

「マクドナルド」ハ英國ニテハ驅逐艦ハ其總保有量ノ一割六分カ嚮導驅逐艦タルヘク又其總噸數ハ潛水艦ノ保有量ニ鑑ミテ定メラルヘキモノト考ヘ居レルカ艦型ハ嚮導驅逐艦最大排水量千八百五十噸驅逐艦千五百噸タルヘク艦齡十六年砲五吋ノ制限ヲ提唱セントスト述ヘタルニ對シ

若槻全權ハ驅逐艦ニ關スル英國案ニハ全然同意ナリト云フコトヲ得サルモ或制限ニハ賛成スル所ナリ是等ハ又専門家間ノ談合ニ譲リ度シ日本ノ重キヲ置クハ其總噸數ニシテ補助艦全體ノ數量中驅逐艦カ如何ナル立場ニ立ツカラ考ヘサルヘカラス英米間ニ於テハ十五萬噸乃至二十萬噸ニ協定セラレタルカ如ク承知シ居ルモ日本ハ其最低數量ニ決定サレンコトヲ希望スルモノナリト述ヘタリ

(ホ) 潛水艦問題

若槻全權ハ潛水艦ニ付テハ日本ハ英國ト見解ヲ異ニセサルヲ得ス日本ハ初ヨリ劣勢ノ海軍力ニ甘ンスルモノナルヲ以テ防禦の武器タル潛水艦保存ノ必要ヲ感スルモノナリ日本ハ其地理上ノ存在、熱帶寒帶ニ互ル地勢ニ鑑ミ相當ノ潛水艦勢力ヲ要シ其現有勢力七萬八千五百噸ヲ要求セント欲ス専門家ハ之ヲ不充分トナスモ軍縮會議ノ開カレムトスル事態ニ顧ミ右ヲ以テ満足セントスルモノナリ但右勢力カ他國ノ勢力ニ對シ七割トナルモ平等トナルモ之ヲ問ハズ七割以上ニ相當スル場合ニハ小巡洋艦驅逐艦ニ於テ之ヲ調節スルノ用意アルモノナリト述ベタリ

潛水艦廢止、保有量、艦型ノ問題

「マクナルド」ハ潛水艦廢止ニ付テハ意見一致セスト言ハザルベカラザルガ如シ乍併此點ニ於ケル意見ノ相違ハ誤解又ハ惡感情ヲ招來スルモノニ非ザルコトヲ信ズ、由來潛水艦ノ用途ハ國柄ニ依ルモノニシテ歐洲ノ西方及南方ニ於テハ防禦ノ具ニアラズシテ攻撃ノ具タリ、我廢止ヲ提唱スルモ此見地ヨリスルモノナリ但日本カ其廢止ニ反對ナルコトハ能ク了承セリ

英國側トシテハ其所要總噸數ニ付今數字ヲ示サザルベシ只單艦最大噸數ヲ千八百噸ト致度シ尙一點申述ヘ度キハ日本ハ審府會議當時ヨリ六萬噸ヲ要求セラレタルニ比シ約二萬噸ヲ増加セラレタルハ如何ナル理由ニ依ルヤト尋ネタルニ對シ

若槻全權ハ潛水艦ノ制限ニ付テハ主義ニ於テ賛成ナリ尙僅カノ數字ナルカ日本ハ單艦最大噸數ヲ二千噸トセンコトヲ希望スルモノナリ尙審府ニ於テ提出セル六萬噸ナル數字ハ當時假ニ試案トシテ提出シタルモノニシテ何國ノ容ルル所トモナラザリシモノナリ情勢ノ變化セシ今日援用スベキモノニアラズ而シテ同會議ニ於テハ日本ハ現有勢力トシテ七萬二千噸ヲ要求セリ今日七萬八千五百噸ト言フハ實ハ右數字ト異ルモノニ非ズ七百噸以下ノ制限外ノ分ヲ繰入レテ計算シタルモノナリト説明セリ

次テ次回會合ニ付相談アリタル後

「マクドナルド」ハ潛水艦、驅逐艦、主力艦等ニ關スル點ハ協定ノ見込アリト考フ唯難點ハ巡洋艦ニ在リト述ベ若槻全權モ余モ同様ニ思考ス要スルニ鈞合ノ問題カ要點ニシテ且難問タル次第ナリ日本件ニ關シテ述ヘタル我方ノ立場ハ充分考量ヲ廻ラシタル上御答ヘシタルモノナルカ尙貴方ノ深甚ナル御考量ヲ煩ハシ度シト述ヘタリ

「マクドナルド」ハ明日ヨリ閣議モ開カルル筈ナレハ兩三日餘裕ヲトリタル上再會致スヘシト述ヘ會見ヲ終レリ

四、專門委員會談

一月二日若槻財部兩全權ヲ來訪ノ際「クレイヤー」ハ専門的細目ニ付日英専門家ノ準備打合會ヲ開カンコトヲ申出テ其ノ

一九三〇年一月六

結果一月六日第一回會合ヲ見タルカ原則の問題ノ解決後ニ非サレハ補助艦ノ細目ニ付討議シ得ストノ我方ノ主張ニ依リ同
日ハ主力艦及航空母艦ニ關スル問題ヲ討議セリ(第十章及第十一章參看)

其後我三全權ト英首相トノ間ニ會談アリ、專門事項ニ關シテハ專門委員ヲシテ意見交換ヲナシタルコトナリタルニ付
一月十六日外務省ニ於テ第二回日英專門委員ノ會合ヲ見タリ(我方左近司、齋藤、豊田、中村、先方「クレイギー」「パッ
クハウス」艦政本部長「ベレル」大佐)

右第二回會談ノ概要左ノ如シ

左近司中將ヨリ先ツ首相ト我全權トノ會談中專門ニ亙ル事項ニ關シ英國側ノ了解ヲ得タキ二三ノ點ニ付キ申述ヘ度シト
前提シ日本ハ英米假協定ヲ基礎トシ大型巡洋艦ニ於テ對米七割比率ヲ主張セントスル關係上約二萬噸精確ニ云ヘハ一萬
七千六百噸ノ建造ヲナスニ至ルヘク右ハ軍縮ノ結果却テ増勢ニ到ルモノナリトナスノ點ニ關シ「固ヨリ日本ハ縮少ヲ希
望スルモノニシテ前述約二萬噸ノ増勢ハ米國カ一萬噸十八隻ヲ保有スル事トナル自然ノ結果ニ外ナラス若シ米國カ十五
隻ニテ満足スルコトトナラハ我方ハ一噸ノ増加モ見サルコトナリ此方却テ我方ノ希望スル所ナリ」ト述ヘ更ニ一ノ假
定且個人ノ所感トシテ「將來ノ大型巡洋艦ノ最大噸數ヲ英國ノ「ヨーク」級ニ相當スル八千四百噸又ハ一層低下シテ八千
噸位トナシ米國カ英國トノ釣合上一萬噸型十三隻殘五隻ハ前述八千噸級ヲ建造スルコトトセハ米國保有量モ若干低下シ
從テ日本ノ保有量モ相對的ニ低下スルコトモナルヘク之亦米國十八萬噸ノ場合ヨリモヨリヨキ結果タルヘシ」ト説明
シ又日本ノ造艦カ輿論ニ不良ノ影響ヲ與フヘシトノ觀測ニ對シテハ「今日以後一九三六年迄ノ日英米三國ノ造艦量ヲ檢
スルニ巡洋艦ノ關スル限リ米國ハ毎年約三萬噸英國ハ約一萬五千噸日本ハ米國ノ七割トシテ八千噸級二隻ノ新造艦ヲ加
ヘ僅ニ五千噸内外ノ程度ニ過キス此事實ハ日本ノ將來ノ立場カ甚タ有利ナルヘシトノ誤解ヲ解ク好資料ナリ」ト説キ過
渡期ニ於ケル日本ノ保有隻數カ十四隻トナルヲ苦慮スルノ點ニ付テハ「專門的見地ヨリスレハ勢力ノ内容ヲ異ニスル一
萬噸級七千噸級ヲ一律同様ノ立場ニ置キテノ議論ハ不合理ナリト言ハサルヘカラス日本ノ保有セントスル勢力ノ内容ヲ

詳ニシ適當ニ輿論ヲ指導スルニ於テハ世人モ容易ニ理解スル所アルヘシ」ト述ヘ此等ノ見解ニ對スル英國側ノ所見ヲ質
ネタル處

「バックハウス」ハ八吋砲艦ニ於テハ噸數ノ問題ニ非スシテ隻數ノ問題ナリト述ヘ「クレイギー」亦隻數ノ方一般民衆ニ
判リ易ク且米國ハ一萬噸級ニ固着シ八千噸型ノ採用ヲ求ムルコト至難ナリト考フル旨ヲ述ヘタリ仍テ左近司中將ハ政治
的ニハ兎モ角軍事上ノ見解トシテハ砲クマテモ一萬噸一隻ト七千噸級一隻トヲ同一價值ニ評價スルハ之ヲ肯スルコト
ヲ得スト答ヘタリ

次テ齋藤部長ヨリ英國ハ米國ニ對シ八吋砲型ノ艦型縮小ノ申出ヲ試ムル意思ナキヤヲ尋ネタルニ

「クレイギー」ハ望マシキ案ナルモ到底米國ノ贊成ヲ得難シト考フ米國ハ二十一隻ヨリ十八隻ニ下スコトスラ容易ニ之ヲ
肯セサルヘク更ニ之ヲ低下スルコトハ困難トスル所ナルヘシ米國ハ大型艦ニ重キヲ置キ隻數ニ頓着セサルニ反シ英國ハ
其ノ隻數ニ重キヲ置ク關係上多數ノ輕巡洋艦ヲ以テ大型ノ不足ヲ補填シタル次第ナリトテ日本モ同様輕巡洋艦ノ保有量
ヲ以テ何トカ調節スルノ工夫ニ出テンコトヲ希望シ「バックハウス」ハ英カ隻數ニ重キヲ置ク所以ハ元來巡洋艦ハ單獨ニ
行動スルコト多キヲ想像セサルヘカラスシテ其場合ニハ艦型ノ大小ニ拘ラス八吋砲艦ハ六吋砲艦ニ對シ遙ニ優越ノ立場
ニアルコト明ナレハナリ若シ艦隊ヲ編成シテ行動スル場合ノミヲ想像スレハ左近司中將ノ言ノ如ク八吋砲艦ノ艦型大小
ニヨリ力ノ差ヲ生スヘキモ巡洋艦ノ性能ニ鑑ミ此說ニ左袒スルコトヲ得ス尙英國トシテハ世界ニ於ケル八吋型ヲ出來得
ル丈ケ減少セントスル希望ヲ有スルモノニシテ此見地ヨリ六千噸ト雖八吋砲ヲ搭載スルコトニハ不賛成ナリト述ヘタリ
(次テ左近司中將ト英國側トノ間ニ英米ノ均勢ナル觀念ニ付議論アリタル後)

「クレイギー」ハ英國ハ米國ニ對シ大型ヲ減シ小型ヲ増加シテ釣合ヲトレリ日本モ單ニ米國ノミヲ目標トシテ比率ヲ主張セ
ス右英國ノ採リタル態度ヲ加味シテ何等カノ妥協案ヲ考ヘラレ間數キヤ又壽府ニ於テハ日英ノ關スル限リ華府條約ノ比
率ニ比シ著シキ増加ナキ程度ニ於テ一應ノ協定ニ達シタル歴史モアリ今同モ其程度ニ落着キ得ヘキモノト考ヘ居ル次第

ナリト述ヘタルニ付キ豊田大佐ヨリ右日英間ノ假案カ専門家間ノ一試案ニシテ本國政府ノ同意ヲ得ルコト能ハナリシ次第ヲ述ヘ之ヲ討論ノ基礎トスルコト謂レナキヲ説述セリ

茲ニ於テ「クレギー」ハ元來交通線領土其他諸般ノ狀況ヲ考慮セハ日英ノ責任ニ自ラ相違アリテ忌憚ナク云ヘハ日本ノ勢力ハ英國ニ比較シハ六割ニテ十分ナリト思考スルモノナルモ英國ハ日本ニ對シ噸數ニ於テ七割四分隻數ニ於テ八割五分ヲ提案セルハ最も好意的ニ考慮ヲ加ヘタル結果ト考ヘ居レリ而シテ今回日本ヨリ對米七割ヲ強硬ニ主張セラルコトハ率直ニ言ヘハ非常ニ失望シ居ル次第ナリト述ヘタルニ對シ左近司中將ハ七割ノ趣旨ハ華府會議ニ於テモ強硬ニ主張セル所ニシテ華府會議以來終始一貫セル態度ナリト應酬シ又豊田大佐ハ領土交通線其他ニ對スル英國ノ立場ハ十分諒解スルモ元來國防ノ責任ニ對シテハ國ニ依リ異ルモノニアラス日本ハ國土防衛ノ責任遂行上對米七割ノ要求ヲナスモノナリト應酬シ「クレギー」ハ英國ハ不戰條約ニ立脚シ相當ノ危險ヲ冒シ隻數ノ減少ヲ行ハントスルモノナリ日本モ幾分ノ「リスク」ヲトラレ度シト答ヘタリ

次テ左近司中將ヨリ本日ハ大型巡洋艦ニ關シ英國側ノ誤解ヲ釋キ日本ノ立場ヲ十分明ニセント欲シタル次第ニテ此上トモ英國側ノ考慮ヲ煩シ度シト述ヘタルニ「クレギー」ハ大型巡洋艦ニ關シ前述ノ趣旨ニヨリ日本側ニ於テモ少シク考慮ヲ加ヘラル間數キヤト云ヘルニ付左近司中將ハ右ハ最も重大ナル問題ニテ既ニ全權ニ於テ取扱ハレ居リ専門委員トシテ御答ヘスヘキ限リニアラスト應酬セリ

別レニ臨ミ「クレギー」ハ主力艦代換開始期ニ付テハ前回申述ヘタルト異リ英國ハ之カ延期ニ同意スルコトナリタル旨ヲ一言セリ

(註) 一月十六日大使館晚餐會ニ於テ「クレギー」ハ佐藤公使ニ對シ日本側ニ於テ伸縮性アル新案ヲ提出サンコトヲ希望シ私見トシテ八吋艦ハ日英共現有勢力ヲ其ノ確保存スルコト即十二、十五ノ隻數ニ制限スルコトシ度ク日本カ十二隻以上ニ上ルニ於テハ英國ハ二十一隻ヲ固執シ妥協殆ト絶望トナルヘキ旨ヲ述ヘ更ニ「日本ニハ潛水艦ニ關シ百パーセントノ要求アリ八吋艦ニテ満足ヲ得サル部分ハ之ヲ輕巡洋艦、驅逐艦ニテ或ハ尺度ノ觀念ヲ加味シテ補充スヘク斯テ不足分ヲ償フヲ得ヘシ潛水艦ハ防禦ノ武器ト見ルヘク之ヲ以テ敵ノ死命ヲ制スルコト能サルヘキカ故ニ日本カ單ニ防禦ノ具ト

シテ必要噸數ヲ要求スルハ丁解ニ難カラス、英國ノ考ニテハ條約ノ期間チ一九三六年迄トシ(米國同意)余ノ短期ナリトノ事ナレハ其ノ後ハ自働的ニ延長スルコトスルモ可ナリ現モ角餘リ長キ先ノ事ヲ考フルハ協定ニ達スルコト雖キニ付此ノ邊ノ期間ヲ取ルコト然ルヘク從テ日本ノ古艦代換等ハ考慮ニ入ルルニ及ハサルコトナルヘシ但シ條約締結ノ際一萬噸ヲ以テ代換スヘシトノ留保ヲナスヲ姑クサルヘシ尤今後五六年ヲ經世情安定シ現在程ノ海軍力ヲ必要トセサルヤモ計ラレス從テ特ニ此ノ點ノミヲ取立テ協定ノ成立ヲ困難ナラシムルノ要ナキニ似タリト述ヘタリ

第六節 對米及對英交涉ニ關スル全權ノ稟申

米國ヲ通過シ大統領及國務長官ト懇談ヲ重ネ更ニ倫敦ニ於テ外相及海相ト會見シタル上三回ニ涉リ「マクドナルド」首相ト意見ヲ交換シタル結果全權ハ其ノ得タル感想及今後ノ措置ニ付一月十四日左ノ意見ヲ稟申セリ

『米英共ニ日本ト協方シテ今回會議ノ成功ヲ期シ度キ希望ハ言語氣色ノ上ニ十分之ヲ看取スルコトヲ得然レ共日本ノ七割比率要求特ニ大型巡洋艦ニ於ケル七割要求ニ關シテハ米國ニ於テハ主力艦ニ於テ六割ヲ承認シタル日本カ補助艦ニ於テ七割ヲ要求スルハ必要以上ノ要求ナリト爲シ居リ若シ當局之ニ同意セハ米國民ハ政府カ日本ニ屈服シタルモノト爲シ大反對ヲ爲スヘク上院ノ批准ヲ得ルコト不可能ト見居ルモノノ如ク又英國ニ於テハ大型巡洋艦ノ對米七割ハ對英大型巡洋艦ノ八割以上トナリ日本ノ勢力余リニ英國ノ勢力ニ接近スルカ故ニ國內輿論ノ反對ヲ受ケ政府ハ之ヲ押シ切ル能ハスト爲スモノノ如ク結局米英共ニ日本ノ要求ヲ其儘承認セス何等カノ形ニ於テ日本ヲ説得シ適當ノ處ニ落着カシメント期シ頗ル苦心シ居ルモノノ如シ、米英共ニ比率ナル文字ヲ避ケン事ヲ我ニ勸告シタルハ其意自ラ知ルヘシ

而シテ談大型巡洋艦保有量ニ及フトキハ毎ニ其國民ノ諒解六ヶ數コトヲ述ヘ我反省ヲ求ムルコト米英殆ント其ノ軌ヲ一ニス此點ニ關シテハ英米ノ間ニ何等カ申合セ有ルニ非サト思ハル、察スルニ彼等ハ到底豫備交渉ニ於テ意見ノ纏マル見込ナシト見越シ適當ノ時機ニ至リ眞劍ノ談判ヲ爲サント決心シ豫備交渉ニ於テハ不即不離ノ態度ヲ採リ居ル筋合モアラシ故ニ此際双方ノ意見ヲ極端ニ開ハシ一刀兩斷ニ左右執レカニ決セントセハ結局喧嘩別レスルノ覺悟ヲ要シ今ニ於テ直ニ此覺悟ヲ以テ速ニ無二押進ムカ如キハ時機尙早ト認ム、然ラハ問題ヲ後日ニ延ストシテ其結果如何ト願ミルニ必スシモ日本

一九三〇年一月十六日大使館晚餐會ニ於テ「クレギー」ハ佐藤公使ニ對シ日本側ニ於テ伸縮性アル新案ヲ提出サンコトヲ希望シ私見トシテ八吋艦ハ日英共現有勢力ヲ其ノ確保存スルコト即十二、十五ノ隻數ニ制限スルコトシ度ク日本カ十二隻以上ニ上ルニ於テハ英國ハ二十一隻ヲ固執シ妥協殆ト絶望トナルヘキ旨ヲ述ヘ更ニ「日本ニハ潛水艦ニ關シ百パーセントノ要求アリ八吋艦ニテ満足ヲ得サル部分ハ之ヲ輕巡洋艦、驅逐艦ニテ或ハ尺度ノ觀念ヲ加味シテ補充スヘク斯テ不足分ヲ償フヲ得ヘシ潛水艦ハ防禦ノ武器ト見ルヘク之ヲ以テ敵ノ死命ヲ制スルコト能サルヘキカ故ニ日本カ單ニ防禦ノ具ト

ノ立場ヲ有利ニスルモノトハ思ハレサルモ形勢ヲ觀察シツアル間ニ何等カノ變化アルヘケレハ之ヲ利用シ適當ノ方策ヲ考フル事トシ此際ハ餘リ焦ラサルヲ得策ト思考ス、加之此際引續キ談判ヲ急クハ唯同様ノコトヲ繰返スノミニテ先方ヲシテ衷心ヨリ首肯セシムルニ至ル新證據ニ乏シ但シ此考察ノ下ニ於テハ豫備會議ニ於テ格別ノ成果ヲ得ルコトナク此儘ニテ本會議ニ臨ムコトトナルコト己ムヲ得ス今後ト雖モ形勢ヲ有利ト爲スカ爲ニ下協議等ニモ尙一層ノ努力ヲ爲スヘキハ勿論ナルモ目下ノ感想一應御參考ニ供シ置クコト無益ニ非スト信ス』

第二編 會議ノ經過

第一章 總 說

倫敦海軍會議ハ第一編記述ノ通關係國間ニ於ケル豫備交渉ヲ經テ一九三〇年一月二十一日英國上院ニ於テ開會セラレ同年四月二十二日「セント、ジェームス」宮ニ於ケル五國條約ノ署名ニ依リテ結了セリ此ノ間九十二日ニ互リタルカ其ノ經過ヲ總說スルニ左ノ如シ

會議ハ之ヲ四期ニ分ツコトヲ得ヘシ、第一期ハ開會ヨリ二月五日米國試案提出ニ至ル迄ノ期間ニシテ各國共所要噸數ノ全部ヲ明示セス會議ハ專門事項ノ討議ニ忙ハシク實質問題ニ付何等ノ進展ヲ示サス、第二期ハ二月五日ヨリ二月二十五日米私的會談ニ至ル期間ニシテ日英米三國ノ保有量ニ關スル內協議全ク行詰リタルニ加ヘ佛國政變ニ依リ會議ハ全然停頓セリ、第三期ハ二月二十五日ヨリ四月一日帝國政府回訓ニ至ル期間ニシテ日英米三國保有量ノ妥協案成立シ佛伊ノ態度モ明トナリ倫敦協定ノ基礎成レリ、第四期ハ四月一日ヨリ同二十二日條約ノ調印ニ至ル期間ニシテ會議ハ其ノ協定事項ヲ整理セリ

第一節 開會ヨリ米國試案提示迄

本會議ハ先ツ議題並議事進行ノ具體的方法ニ付決定セサルヘカラサル處該問題ハ會議開會前五國間ニ協定ナカリシヲ以テ五國首席全權ハ會議開會ニ先テ（一月二十日）議事進行ノ方法ニ關シ打合ヲナシタリ右ノ結果決定セラレタル最重要ナル事項ハ各自カ公式ノ席上ニ於テ論爭ヲ惹起スルカ如キ提議（所要量問題等）ヲ提起セサルコトヲ約セル一事ナリ、從ツテ一月二十一日開會式（第一回總會）ニ於ケル各國首席全權ノ演說ハ勿論一月二十三日各國ノ態度ヲ聲明スル爲メ開會セラ

開會ヨリ
二月五日
迄
議事進行
ノ具體的
方法決定